

# 北京会議へ向けてV

国連準備会議とNGOフォーラム

有馬真喜子

チエチエンで何が起ったのか

息子を取り戻しに行ったロシアの母たち

寺沢潤世



208号

今月の発信

——あこら新宿

# ファイローに “不戦の家”を建てませんか

戦後五十年の国会決議は、なんとも恥ずかしい結末になりました。北京のNGOフォーラムでも、必ず問題になるでしょう。その時、「日本政府が悪い」と言っても、「その政府を選び、支えているのはあなた方ではないか」と、切り返されるだけです。

北京会議NGOフォーラムの会場に決まったファイローには、新しい建物を建てるができます。この際思いきって和風建築で「不戦の家」を建てませんか。日中戦争、慰安婦問題ほか、日本の侵略の実状を示すとともに、日本の被爆、戦後の占領や民主化の過程を示す展示場をつくり、会議中は宿泊や会議にも利用する。――夢かもしれませんが、今すぐ着手すれば間に合います。

北京の宿泊をファイローに変更すれば、一人最低一万円は安くなります。日本からの参加者が一人一万円ずつカンパすれば、不可能ではありません。日本の一万円は、中国では百万円の値打ちになります。恥ずかしい日本政府に代わって、女たちで不戦の灯を掲げ続けませんか。

\*\*\*\*\*

## 一本のペンの明日

増田れい子

一本のペンをにぎりしめて生きてきた……という書き出しではじまる私個人のペンの歩みをまとめた「一本のペン」というタイトルの本を、この春大月書店から出版した。

一九五三年四月から九一年三月まで通算三十八年の新聞記者生活を送ったわけだが、その間に私が書けたことと書けなかったことを自分なりに点検してみたかったのである。

浅沼刺殺事件のサイドニュース、皇太子妃決定のストーリー、女性に対する差別の様相、大正七年の米騒動の主役の話、戦争と女性の問題、沖縄戦の実態、国連女性の十年運動、均等法批判、従軍慰安婦問題……。さまざまなテーマにぶつかってきた。それをどう書いたか、実際の記事を再録し直視した。

そうして思ったことは、私が三十八年間こたわり続けたものは、女性であり戦争であつた。つまり女性に対する抑圧のシステム（いまの政治、社会、文化のありかた）であり世界に張りめぐらされている戦争をはじめとした暴力是認の枠組であつた。

私の一本のペンは、まさにこういう旧来の陋習に対する蠅螂の斧だつたのだろうか、しかしまたそこに意味があつたのかも知れない。

だが、これからのペンは？ それぞれに孤立した蠅螂の斧であつていいのだろうか。

実は六月十七日、女性ジャーナリストや女性問題の研究者、働く女性たちと共に「一本のペンまつり」という催しをした。男性ジャーナリストにも参加してもらつた。そこでいまのジャーナリズムに対する批判と女性ジャーナリストへの期待が話しあわれたのだが、期せずして提言されたのは女性ジャーナリストの広汎でゆるやかな連帯にもとづく会の必要性についてだつた。蠅螂の斧を鍛えるため、互いの魂に触れあうための、はげましあうためのエネルギーのもとのための、会である。

母港づくりといったらいいのだろうか。ふるさとづくりだろうか。私はいつになくときめきを感じている。

## 目次

巻頭言 一本のペンの明日 増田れい子 1

連読講座 北京会議への道 (8)

国連準備会議とNGOフォーラム 有馬真喜子 4

TOPICS 北京NGO会場はファイローに決定 ほか 41

チエチエンで何が起こったのか

——息子を取り戻しに行ったロシアの母たち—— 寺沢潤世 44

めじやーなりすとのめ 家事を夫に任せよう 坂井 幸 72

気になる英語 セカンド・シフト 奥川 睦 74

袁先生のドロナワ中国語(1) 袁 晞 76

ペルーの女は立ち上がった 13

第五章 女たちは立ち上がった(1)

キャロル アンドレアス / 訳 サンディ・サカモト 78

## 載 連

看護婦・光と影 24 萩原利津子さん(2) 増田れい子 90

女ひとりドケチ旅 6 パキスタンへ 辻 みゆき 96

総理府 ニュースレター「北京会議情報」 107

## 国連準備会議とNGOフォーラム

横浜市女性協会理事 長  
横浜女性フォーラム館長

有馬真喜子

今日の私の役目は、今北京に向けての世界の動きを整理させていただくこと。という理由でということが問題になっているのかを取り上げることだと理解しております。七五年会議以来の会議につきましては、初回到坂東真理子さんがおよその流れをお話しになったとお聞きしていますので、そこは省略させていただき、国際婦人年とか北京会議とか、将来戦略とかが何のためにあったのか、何のためにあるのかから申し上げたいと思います。

### 国際婦人年の主旋律は「人権」

一九七五年、昭和五〇年が国際婦人年と定められまして、その年に第一回世界婦人会議がありました。場所はメキシコです。

そもそもなぜ国際婦人年を設けようとしたのか、これは人権問題です。他の何でもなく、すぐれて人権の問題として婦人年があったと、そのことをまずしっかり頭に入れていただきたい

\*\*\*\*\*

と思います。今日まで流れの中心をなしているのが人権で、その間に開発とか暴力の問題が入ってきますが、音楽という主旋律は人権ということです。

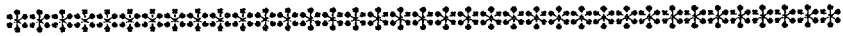
ではなぜ国連が一九七五年という時点で、女性問題を人権問題として取り上げたかという人権問題は国連が設立されて以来、国連が取り組むべき最重要課題というふうに認識されていたわけです。

今日国連というと、安全保障理事会でPKOがどうだとかいいますが、それは国連の中心の流れではない。国連が設立されたそもそもの精神は、ぜひ国連憲章をお読みいただきたいのですが、「我々はこの五〇年間に二度にわたる世界戦争を体験した。そこでこういうことがなければならぬ」として「地球上のすべての人の人権の尊重こそ国連の取り組むべき最重要課題であり、これこそ戦争という災害をもたらさないことである」という趣旨のことが書いてあるのです。

国連はこういうことで、すべての人に人権を保障することを高らかに掲げてスタートし、実行してきたのです。

このとき気をつけなければいけないのは「すべての人」というのは誰のことかということですが。すべての人とは口当たりのいい言葉です。「すべての日本国民は幸福でなければならぬ」などといいます。その時、すべての人とは誰なのかと考える必要がある。それは強い人だけではなく、もっと弱い立場の人も含むということが見えてきます。

だから世界人権宣言には、「すべての人」とは、あらゆる人種、民族、宗教、性、どういう思想信条を持っているか、どんな門地に生まれたか、そういうことに関わりなく、すべての人



の人権を保障するということなのだと言われています。

国連は「人種にかかわらず人権を保障する」と言われていることを受けて、まず人種問題に取り組んできたわけです。ですからアパルトヘイト、人種隔離政策を採ってきた南ア連邦の権利を停止してきたわけです。

南アには国際社会の一員として、国連メンバーとしての権利を享受することを認めなかった。一昨年、初めて新しい体制ができ、国連活動に南アも参加することになりました。

その次に国連が手を付けたのが、性の差別。「性に関わりなく同じ人権を享受すべきだ」との旗を掲げて、国際婦人年が実施されたのです。

私が一九七五年にメキシコに取材にいったころには、そういうことはわかっていませんでした。それまで日本にも婦人運動はありました。戦前の運動を受けて、戦後、女性人間になったわけです。人間になったというのは初めて参政権が女性にも認められたとか、民法で無能力者でなくなったとか、高等教育に進学できるようになったということです。それは先人の努力の上に、駐留軍の民主化政策があったからで、婦人参政権運動は戦前からありました。市川房枝先生とか、平塚らいてうさんとか、与謝野晶子さんとか関わってきた人があった。戦争中の女性の戦争協力のこともあるって、駐留軍も女性の民主化には力を入れたようです。

しかしどうしても婦人解放運動という趣きがあつて、世間一般には口やかましい女どもが何か言っているというイメージでした。また携わる側も、戦後の盛り上がりから「これで権利もできた」と運動が下火になって、その頃、市川先生は「権利の上に眠るな」とおっしゃっていたわけです。



その間にウーマンリブ運動の盛り上がりもありましたが、率直に言って日本では女性の地位向上は大きな問題とはなっていないませんでした。そういう中で世界婦人会議が開かれたわけです。そういうバックグラウンドの中で取材にいったわけです。開会式で当時の国連事務総長ワルトハイム氏がオープニングのスピーチをされた。そしていきなり「世界には数々の差別があるが、女性差別ほど大掛かりなものはない。なぜなら世界の人口の半分が差別されているのだから」と言われたのです。

それを聞いて「えーっ、日本とは全然違う」と思ったのです。何が違うかというと、まず国連事務総長という高い立場の人が「女性問題」を語ることへの驚き、「人類」という視点からそれを語ることへの驚き、「差別」という言葉を語ることへの驚きなどでした。それまで日本では女性差別という言い方は一般的ではありませんでした。差別というきつい言い方は止しましょうという暗黙の了解がありまして、女性差別という言い方はしなかった。日本特有のマイルドな言い方がふつうで、これは差別なんだとピシッと言うことはなかったのです。

ですから「世界ではそういうことだったのか」と、勉強したわけです。差別の問題、性が違うということで人権が享受できていない人がいるとすれば、正さねばならない。そういう社会は不正である、事務総長はおっしゃって、「そうか。国際婦人年はそういうことで設けられたのか」と冒頭から思い知らされたわけです。

これは私の不勉強ですが、当時日本から取材にいった人たちは共通の思いを持ったと思います。その当時すでに、いま日本でもはやされている男女共同参画という考えをしていた国もありました。スウェーデンです。バルメ首相という当時の総理大臣が首席代表としてお見えに



なつた。そのこと自体が驚きでした。

日本は誰が代表かというと、藤田タキ先生でした。藤田先生が悪いと言っているのではなく、どういう資格でかというと、労働省という一省庁の、婦人少年問題審議会という一審議会の座長である、その方が首席代表でした。

日本では世界婦人会議と言うと、その程度にしか考えられていなかったということです。一省の一審議会の座長。ところがスウェーデンでは一国の首相がお見えになった。その他にも閣僚クラスがたくさんいました。

そのときバルメ首相が言われた言葉を私はまだ忘れないのですが、「今回の婦人会議はもつと女性が社会に進出しなければならぬということを語る会であるけれど、同時に言われなければならぬのは、男性がもつと家庭に、地域に参画しなければならないことだ。この二つは対のことなんだ」と言われたのです。

今から考えると当たり前と思われるでしょうが、当時は非常に新鮮で、一国の首相が言われたのは驚きでした。

今日、総理の施政方針演説、あまりお聞きにならないと思いますが、後で新聞なんか見ますと、付け足しのように一行「男女共同参画社会の実現を」なんて出てくるようになります。しかし一國の総理が世界に向かってそういうことを話してこようと、二十年前に実践した国があったことは、思いを致すべきことだと思っています。

## 二〇〇〇年に「結果の平等」の実現を設定したナイロビ会議

ともあれ、一九七五年に国際婦人年があり、世界会議があり世界行動計画が採択され、次の十年を「国連婦人の十年」とすると定められました。その間に、中間会議が八〇年コペンハーゲンで、国連婦人の十年最終年の世界会議が八五年ナイロビで行われました。ナイロビの時に「西暦二〇〇〇年に向けての婦人の地位向上のためのナイロビ将来戦略」というのが採択されました。

これは全部で三七二項目からなるものでした。これは一九八五年からの国連婦人の十年が終わったから、これで婦人問題は終わりということではなく、ナイロビで検討した結果、まだまだ女性の前には解決すべきことがあるので、目標を二〇〇〇年まで延ばしましょう、と「ナイロビ将来戦略」が採択されたわけです。

そこで今のところ、目標は二〇〇〇年になっているわけですが、その先はどうなるかはわかりません。流れだけを申し上げると、一九九五年に第四回世界婦人会議が行われます。同時にすでに決まっているのは、二〇〇〇年に第五回世界婦人会議が行われることで、どこで行われるかは未定ですが、そこまではあるということです。

それではなぜ世界会議があるかということです。世界会議は、五年おきとか、十年おきに行われますが、それまでの間に先回採択された行動計画に沿って各国が努めてくる。その努めたことのどれだけが達成され、どういう問題が残っているのか、今私たちの目の前に立ち塞がる

\*\*\*\*\*

問題はこういうものなのか検証することが一つです。

そして今度は次の目標に向かってとるべき行動はどのようなものか、と行動計画を立てていく実際の側面が一つあります。見直しをするわけです。国連というのは国の集合ですから、行動するのはそれぞれの国です。

二番目に世界会議というのは鐘を鳴らす役割なんです。つまりイベントですね。「女性問題がここにありますよ」と、鐘を鳴らす。そうしないと流れていってしまうところがありまして、鐘を鳴らして「ここにあるぞ」と、皆にわかつていただく役割があります。

過去もこういうことをやってきましたし、北京会議もその役割を果たすと思います。その二つの面から言っていきますが、まず実際の面からいきますと、一九七五年から八五年まで、各国政府が目指したことというのは、大きくいうと、法律とか制度の面、これは別の言い方をすると、チャンス、機会の平等といわれています。つまり法律や制度を整える、そのことによって性によって違う機会があれば正す。つまりどちらかの性だけは機会に恵まれて、どちらかの性は恵まれていないということのない、機会の平等を作ろうというふうに努めてきたのです。それでは八五年から二〇〇〇年までの目標は何かというと、実際上の平等といわれています。法律や制度は整った。しかし実際に平等にならなければ絵に描いた餅ではないか。「機会の平等」に対して、「結果の平等」と。

今私たちのいるところはまさにここで、機会の平等はほぼ達成されてきた。今、本当に目指そうとしているのは結果としての平等、そのことを目指そうとしているのが大まかな流れだと、ご理解いただければいいと思います。



国際文書などでは「法律の平等から実際の平等へ」という言い方がなされています。

機会の平等ということですからお気付きかと思いますが、この間に日本で作られた「男女雇用機会均等法」ですね。まさに機会の均等ですね。それではその結果、結果の平等が達成されているかといえば、だれも達成されていると思う人はいないはずです。結果の平等があれによって達成されているかといえば、否ですね。法律はあっても女子学生は就職の機会にすら恵まれていない、長年勤めるほど賃金格差は開くといった現実があります。

今、そうすると私たちが目指すべきは結果の平等を達成するために何をするかということですね。つまり、チャンスはできたと。何とか形式は整った。しかし本当に平等にしていかなければ意味がない、仏を作って魂を入れないようなものだということになるわけです。そこところが今進行中だと、流れとして整理できると思います。

今度の北京で採択される行動綱領に関しては、この結果の平等重視の線が全体に色濃く出てくると思います。このことは日本政府にとって、我々日本にとって最も不得手な、苦手なことに属するということはお感じになるでしょう。法律を作ることまではうまい。格好をつける、そこまではうまい。しかし、それを作った結果、どうなるかということに関しては、実に足りない部分があるということは、わが国のいろいろな場面で目にする事です。

これは政府だけが悪いというだけでなく、私たち自身にそういうところがありはしないかということを含めて、考えていかなければならない。別の言葉で言うところ、北京会議とは大変なものに挑戦することになるのではないか。そのことを知っておく必要があるのではないかと思います。

資料1 世界女性会議の流れ

	国連婦人の10年 1976～1985年						
	一九七五年（昭和五〇年）	一九七七年（昭和五二年）	一九七九年（昭和五四年）	一九八〇年（昭和五五年）	一九八一年（昭和五六年）	一九八五年（昭和六〇年）	
国連の動き	国際婦人年（目標―平等、開発、平和） 国際婦人年世界会議（メキシコシティ） 「世界行動計画」と「メキシコ宣言」を採択	国連第三四回総会「女子差別撤廃条約」採択	「国連婦人の十年 中間年世界会議（コペンハーゲン）」 「国際婦人の十年後半期行動プログラム」採択	「国連婦人の十年」ナイロビ世界会議 （西暦二〇〇〇年に向けての）「婦人の地位向上のためのナイロビ将来戦略」採択（目標―平等、開発、平和）			
日本の動き	婦人問題企画推進本部設置 婦人問題企画推進本部に参与を設置 婦人問題企画推進会議開催 「国内行動計画」策定、国立婦人教育会館オープン		「国内行動計画後期重点目標」策定	「国籍法」の施行 「雇用機会均等法」の公布 女子差別撤廃条約」批准	婦人問題規格推進本部拡充―構成を全庁に拡大、任務も拡充 婦人問題企画推進有識者会議開催 「西暦二〇〇〇年に向けての新国内行動計画」策定		
	一九七五年（昭和五〇年）	一九七七年（昭和五二年）	一九七九年（昭和五四年）	一九八〇年（昭和五五年）	一九八一年（昭和五六年）	一九八五年（昭和六〇年）	
	一九九〇年（平成二年）	一九九一年（平成三年）	一九九二年（平成四年）	一九九四年（平成六年）	一九九五年（平成七年）		
	国連婦人の地位委員会拡大会議。 国連経済社会理事会「婦人の地位向上のためのナイロビ将来戦略」に関する第一回見直しと評価に伴う勧告及び結論」採択		ESCAP地域準備会議（ジャカルタ） 「ジャカルタ宣言」（地域行動計画を含む）採択	第四回世界女性会議（北京）			
	「西暦二〇〇〇年に向けての新国内行動計画（第一次改定）」策定	「育児休業法」の施行	男女共同参画室、男女共同参画審議会設置 男女共同参画推進本部設置				



お配りした資料には、七五年、世界行動計画採択、八〇年、国連婦人の十年後半期行動プログラム採択、ナイロビで二〇〇〇年に向けての将来戦略採択と書いてありますが、この行動計画が満場一致で採択されたのは、ナイロビ将来戦略が初めてなのです。メキシコでも世界行動計画は満場一致ではありませんでした。コペンハーゲンの後半期行動プログラムも満場一致ではありませんでした。この時は反対四票、棄権二票、残りが賛成でした。結構大きな反対、棄権が出ています。あの時の反対はアメリカ、イスラエル、カナダ、オーストラリアでしたか、西側諸国のおおよそが棄権に回りました。その中で日本は賛成に回ったのです。開発途上国から非常に評価されたということもありましたが、ともあれ、反対とか棄権が出て、満場一致の採択はナイロビ将来戦略が最初であり、そのウエイトは大変重い。これは大変価値のあるものと考えする必要があります。ナイロビ将来戦略の価値の一つの側面です。

### 北京で討論される十の問題領域は「行動」がキーポイント

それでこの発展の上に北京ではどういうことが考えられているか、整理してお話したほうがいいと思います。

北京はナイロビから十年経ちます。各国で活発な活動を続けてきたわけです。その結果、例えば一九七五年に比べて女性の地位がかなり向上してきていると思います。今度の北京会議で採択する行動綱領は、資料に「第四回世界女性会議の行動綱領の十の重大問題領域」と書いて

ありますが、これが基礎になるとお考えください。

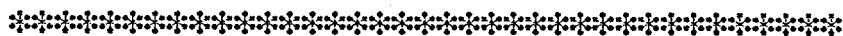
今度の行動綱領に關しましては、準備委員会で行くつかの合意がありました。それはナイロビ将来戦略が三七二項目という膨大なものでした。それで女性の問題を網羅してはいたのですが、あれを隅から隅まで読んだ人がどれだけいるか、冗談に「作った人以外に読んだ人はいない」と言ったりするくらいの分厚いものでしたのです。

それで今度はそれをやめようと、非常に簡潔でわかりやすい言葉を使って、問題を限って定義しようということになったのです。問題領域として十くらいに絞り込むうではないか。行動計画と行動綱領とどう違うのか議論があるのですが、行動計画は一つ一つバラバラの計画で、綱領はプラットフォームですからもつと互いに連携したものであると、要するに名前も変わりました。

簡潔でわかりやすい短い物にしようというのが一つ。二つ目として、これを作るに当たって、北京会議のモットーは変えない。平等・開発・平和というのは、メキシコ以来そのままである。ただ今回はそれに「行動」をつけようというわけで、平等・開発・平和への行動となったわけです。英語でいうと、Equality・Development・PeaceにAction forを付ける。つまり今回は行動を重視する。この「」への行動が大切である。特に違ったことをしようという領域はない。問題点はおおよそわかっている。大切なのはそれへの行動があるかないかなのだ、ということ。Action for を付ける、ということが決められ、したがって、行動綱領の第二の特徴として、行動にこだわっています。

例えばどういふことかといえ、目標値を作る。何年までに何パーセントか、何年までにこ





れをやり遂げるか、というような目標値を作ろうではないか。行動とはそういうことですね。結果の平等をもたらすとはそういうことでして、目標値を作つてそれに向かつて実践していくということが、結果の平等にとつて大事なことのですが、そういうものにしてようではないか。そういう諒解の下に行動綱領の原案ができています。最終的に行動綱領の原案作りは今年の三月十五日から行われる婦人の地位委員会で出来上がることになっています。ただこれは出来上がるかどうかわかりません。いろいろ議論を含む問題もありますし、カイロの人口開発会議がそうであつたように、とにかく括弧だらけのあまりよくまとまっていないものになりそうですが、ともあれ三月十五日から三週間の、婦人の地位委員会で一応作られることになっています。行動綱領は現在のところ、どういう枠組みになっているかという点、まず「使命の声明」です。この行動綱領の使命は何であるかが、ごく簡潔に書かれる。

二番目に「世界の枠組み」の分析がくることになっています。ベルリンの壁の崩壊以来、世界の枠組みが変わつてしまつたんですね。冷戦構造がなくなつて、それはプラスの面ですが、代わつて民族紛争が各地で激化しているとかが起こつていますので、その女性に与える影響を分析する。これは長くないものです。

三番目に重大問題領域がありまして、四番目はそこからとるべき行動は何かが導き出されまゝです。五番目にそれを実施するための制度的整備、六番目が財政的整備です。

変わるかもしれませんが、おおよそはこのままでしょう。中心部分はしたがつて三と四です。重大問題領域というのが、どういふのがあるかといへば、お手許にある「第四回世界女性会議で採択予定の行動綱領の十の重大領域」です。

一番最初は「女性への持続し増大する貧困の重荷」、二番目として「教育と保健」、三番目「女性に対する暴力」、四番目「紛争の女性への影響」、五番目「経済構造への女性のアクセシビリティの参加の不十分」、六番目が「あらゆるレベルにおける権力、及び政策決定の男女間の分担の不平等」、七番目「女性の地位向上の機構の不十分」、八番目「女性の人権の認識、関与の欠如」、九番目「マスメディアの活用の不十分」、十番目「天然資源の管理、環境保護の女性の貢献に対して十分理解がなく、支援も欠けている」と、こういうふうな十の分野が取り上げられ、これに対してそれぞれどういう問題があるかがきて、最後にとるべき行動がくる、というふうになっています。

## 資料2 第四回世界女性会議で採択予定の行動綱領の10の重大問題領域

- A 女性への持続し、増大する貧困の重荷  
B 教育、保健及び関連サービス並びにその他の女性の能力を最大限に活用するための手段へのアクセシビリティの不十分  
C 女性に対する暴力  
D 武力及びその他の種類の紛争の女性に及ぼす影響  
E 経済構造及び政策の決定並びに生産過程そのものへの女性のアクセシビリティ及び参加の不十分  
F あらゆるレベルにおける権力及び政策決定の男女の間の分担の不平等  
G あらゆるレベルにおける女性の地位向上を促進するための機構の不十分  
H 国際的及び国内的に認められた女性の人権の認識及びコミットメント(関与)の欠如  
I 女性の社会への積極的な貢献を促進するためのマスメディアの活用の不十分  
J 天然資源の管理及び環境の保護に対する女性の貢献の十分な理解と支援の欠如



これが一年前の婦人の地位委員会で出てきたおおよそのものですが、このときにいくつかの議論がありました。というのは昨年の婦人の地位委員会に原案が出てきたときには、このFの「あらゆるレベルにおける権力、及び政策決定の男女間の分担の不平等」、これが一番最初にきていたわけです。しかし議論の過程で開発途上国の熱心な主張により、貧困の問題がトップに上りました。

それからそれまで出ていなかった問題が、昨年の婦人の地位委員会で原案の形で付け加わったのです。その一つがIのマスメディアの問題、それから環境問題と女性の問題、これも出たりひっ込んだりしていたのですが、ここではつきり出たのです。

Fの権力、及び政策決定の不平等がトップであるべきか、あるいは貧困がトップであるべきかは、相当激烈な議論がありました。どちらかというと西側先進国は権力・政策決定の問題がトップだと言い、途上国は貧困の問題こそが大事だと言い、議論の結果、順序が変わったのです。

その結果、最後に一文が付いていて「この順序は女性の関心を反映したものではあるが、その重要性を表したものではない。重要度はすべて平等である」と付け加えられています。苦心の策だと思っています。

その後の動きですが、今までキャッチしている情報によると、Bの教育と保健が分けられるが、つて領域が十一になるということはあるようです。教育と健康を一緒にするのはおかしいということです。

行動綱領には、昨年行われた、五つの各地の準備会議の結果を反映させることになっていま



す。各地域とはアジア・太平洋地域、ヨーロッパ・その他、ラテンアメリカ、アフリカ、西アジア諸国ですが、その結果、十の領域にもっとこんな問題を入れようということも出ています。例えば、ヨーロッパで統計の問題が出ています。女性をはっきりさせる統計が不十分で、実態がわかっていない。そこでジェンダーの視点を入れた統計の問題を入れるべきであると。それから慣習法、宗教、こういうものが女性に及ぼす影響を取り上げるべきだと出ています。アフリカから出ているそうです。一番難しい問題を難しい地域が出してきたなと思います。

家族、これを入れるべきだと中南米から出ています。ですから十大問題領域は十一になるか十二になるか今のところわかりません。(編集部注 その後、ことし三月の第三九回国連女性の地位委員会で、保健が、教育と保健に分かれ、新たに少女が加わって十二項目になりました。「あこら」207号参照)

しかし、簡潔に短く、書いた人以外はだれも読まないといったものではなく、皆に読んでいただけるものにしよう、という線はくずさないようにしています。

### まず貧困による無教育の解消を

では、まず貧困の問題です。途上国がなぜそんなに強く主張するのかというと、「貧困の女性化」が言われているからです。Feminization というような聞き慣れない言葉ですが、世界の貧困人口はたくさんいるのですが、その中でも女性に偏ってくる傾向が強くなっていることを問題にしています。

一つには経済における技術の進歩ですね。テクノロジーが進歩すると、教育を受けて使いこ



なせる人たちがいい職業を得る、いい給料を取ることになりますね。すると、とかく教育から取り残されがちな女性是不利になる。世界の非識字者の七割が女性だといわれます。それは女の人が頭が悪いということではなく——そんなことを言う人もいますが全然違いますね——もし一家の中に一人しか教育を受けさせるお金がなかったら、男の子に教育を受けさせ、女の子は子守にやるといったことが多いのです。

日本もつい戦前までそうでした。「おしん」を見ればわかりますね。そういう状況があるから、女性はハイテクノロジー技術とか、熟練労働に就きにくいのですね。

そこで技術の進歩、経済の高度化がまんべんなく人々に幸せをもたらすのではなく、女性に脱落しがちで、その結果、貧困層が女性に偏りがちになっているという分析があるのです。

他に、構造調整政策やODAのあり方への問い直しもあります。それで貧困の問題を大きく取り上げるべきだと、途上国の人は言っているのです。それに対して取るべき行動は、女性に対する教育・訓練の重要性、あるいは開発計画に女性の視点を入れることだと声を高くして言っています。こういうことが貧困が一番にきている背景です。

それから「教育・保健」ですが、これはいま言ったように非識字者の七割が女性だという現状ですね。女性が教育に参加する機会が与えられず、女の子は学校をドロップアウトするケースが多いことです。それは女の子が根気がないというのではなく、すぐ稼げる仕事があれば女の子に学校をやめさせるという現状があるからです。

それから「女性に対する暴力」ですが、過去三回の女性会議に比べて新しく持ち込まれ、大きく取り上げられている問題です。C、D、Hですね。「女性に対する暴力」、「紛争が女性に

\*\*\*\*\*

及ぼす影響」、「女性の人權の問題」。女性に対する暴力については一言で言えないのですが、女子差別撤廃条約で十分にカバーできていない問題というふうに言われています。

さっきの年表に一九七九年、国連第三四回総会、女子差別撤廃条約採択というふうに書いてありまして、八四年、日本のところに女子差別撤廃条約批准と書いてあります。これは世界の女性の憲法であると考えてよいほど重要な条約だといえます。

そこにはあらゆる女性差別の基本的問題がカバーされていますが、暴力の問題は十分にカバーされていないという認識がありまして、九〇年代の初めから大きく浮かび上がってきて、三年の国連総会で女性に対する暴力の撤廃に関する宣言が採択されたのです。

撤廃宣言の原案を作ったのは婦人の地位委員会として、私はそのワーキンググループから参加して経過を見てきました。

## NGOフォーラムの提言を大幅に採用

女性に対する暴力と世界会議の関係についていいますと、コペンハーゲン会議あたりから顔を出していたのですが、八五年のナイロビ会議のNGOフォーラムで非常に大きく取り上げられたのです。

私は三回とも取材に行っていて、NGOフォーラムを取材してびっくりしたのです。七五年に不覚でびっくりしたように、八五年にナイロビで取材したときも、どうしてこんなに暴力のフォーラムが多いのだろうとびっくりし、日本ではまだ大きな問題ではなかったので、わから

\*\*\*\*\*

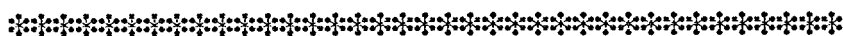
ないなと思うところがあつたのです。しかし、各国の女性は家庭内暴力や結婚にともなう暴力について活発に発言していました。

民間の女性が提起し、それが宣言になり、政府間会議で重大な関心領域になり、という流れになっていくと思います。ナイロビで民間から問題提起があり、同時に女子差別撤廃条約を審議する委員会からも「ここは条約では不十分だ」という提起があり、今の宣言になったのです。ここでいわれている女性に対する暴力は、どういう範囲を含むかといえば、公的、私的を問わないことになっています。国家権力によって行われる暴力も、私人によって行われる暴力もすべて含む。国家が行う暴力も、家庭内暴力も含むということなんです。

種類については三つ触れられていて、一つは、肉体的物理的暴力、一つは精神的暴力、そして性的暴力の三つです。その暴力を冒す冒さないという定義も二つありまして、一つは作為、積極的に加える暴力です。もう一つはなおざりにする——不作為の暴力も含む、範囲の広いもののなのです。

全部で五条からなるものですが、Cの「女性に対する暴力」はそれが一つの基盤になっています。問題点はどこにあるのか、取るべき行動はどうであるのか考える基盤になっていると考ええていいかと思っています。

この暴力は家庭内暴力もあれば、職場におけるいわゆるセクシャルハラスメントも含みます。それから慣習に基づく暴力、例えばインドから出されている例ですが、持参金が少ないということで花嫁を焼き殺すという暴力も含まれる。慣習の関連で、女性のみに行われる性的な慣習、アフリカのイスラム国などで行われる女性性器の切除とかを含んでいます。



Dの「紛争の女性に及ぼす影響」と関連して、国家による暴力、代表的なものが旧ユーゴスラビアの民族浄化の手段としてのシステムチックなレイプ、それが代表例として言及されています。

そうなるに従軍慰安婦問題も出てくるのではと想像されるでしょうが、案では出ていません。どうしてかと思われるでしょうが、国と国の会議だからということだけでなく、二〇〇〇年を目標とするものですから、全体として現在及び将来に向けてという傾向が強いからだと思います。

従軍慰安婦問題を現在の問題と考えるか、過去の問題と考えるかは議論の分かれるところですが、客観的事実として言う、出てきていないことは事実です。

昨年一年間に行われた五つの地域会議の中では、ジャカルタ会議の中で議論としては出てきましたが、公式宣言には出てきませんでした。ただしNGOフォーラムにおいては、慰安婦問題は活発に取り上げられていました。

問題はよく重なつてはいますが、取り上げられ方については政府間会議とNGOフォーラムでは違います。NGOフォーラムではもつと直截に、幅広く、問題意識も強いということがあります。

あとはFの「権力及び政策決定の分担の不平等」、これは日本には大きく関わりのあるところとして、女性の進出が日本では少ないわけで、前回坂東さんが話されたと思いますが、政策決定過程への女性の参加が非常に少ない。

去年の十月にヨーロッパの準備会合にいったのですが、モンゲラ事務局長が冒頭のあいさつ





で「スウェーデン、おめでとう！」と始めたのです。「スウェーデンにおいては、新内閣において二人の閣僚が男女十一人ずつになった。五〇パーセントの参画は女性の夢であつたけれど、いまやそれは現実になった」とスピーチの冒頭に言われたのです。大きな拍手でした。

スウェーデンの代表はモナ・サリンという副首相で、女性問題担当大臣だそうですが、彼女がスピーチをしたのですが、印象に残っているのが、「これは自然にできたのではない。首相の決断だったのだ。首相がそうしようと決断した。五〇パーセントが内閣で実現すれば、あらゆるところでモデルになるだろう。それで首相は決断して男十一人女十一人の内閣を作ったのだ。だから今私たちは国のいろいろなところで、この五〇対五〇を実現することを願っています」というスピーチでした。

「かっこいいなー」と思いました。やつぱり二十年進んでいるのではないのでしょうか。かといって二十年経ったら日本で五〇対五〇が実現しているかというところ、まだ夢のような気がするのですが。二十年の開きをつくづく痛感しました。

彼女の言うには「だから平等な参画は、やろうという意志があればできる」と。なるほど言われればそうですね。そのことはそれほどすごいことではなく、だれかが決めたらできるのではないかと言われれば、「そうだな」と思うのですが、「決めてくれそうもないな」とも思ったりしました。

もう一つ印象的だったのは、そのモナ・サリンが三十代後半か、四十代前半で、その人が副首相だということです。スウェーデンの育児休業制度がどうなっているかと説明したのですが、その時「私も含めて」と言いました。「自分も育児休業を取ってやっている」と。



私は帰ってから、スウェーデン研究では第一人者の岡沢先生にお目にかかる機会があつて、「スウェーデンはすごかったですよ。モナ・サリンがこうで」などと、申し上げると、先生は「モナ・サリンはスウェーデンでは最も人気のある女性だ」と。「彼女は学校の給食の仕事をしていた女性で、そこから政党に入ってキャリアを作った、ごくごく普通の働く女性だ」と。その中で勉強して、政策もしっかりしているし、スピーチも上手だし、子どもも二、三人いて、育児休業を取りながら働いている、生き生きとした女性ということで評価されている女性だということでした。

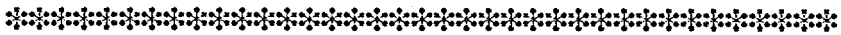
北京会議にモナ・サリンは多分来ます。帰りに日本に寄ってくれるといいな、などと思つています。そんな人が来たら、影響を与えるじゃないですか。「あんなことができるのか。あんな人がいるのか」と、励まされるところがありますよね。

### 国境を破ったマスメディア

人権は後にして、その次のマスメディアのことですが、さつき申し上げたように、それまで事務局原案に出ていなかったものがこのとき出たものです。

これは二つの要素があります。一つはマスメディアが女性のイメージを積極的ないイメージを宣伝するのではなく欲望の対象として描く、あるいは伝統的な役割を望ましい姿として描く、というネガティブな側面があります。

結局女性はマスメディアという影響の強いものから励まされるより、むしろ足を引っ張られ



るということです。

女性週刊誌などはこの感なきにしもあらずです。女性のもっとマスメディアに発言すべきだし、女性をもっと編集方針を決めるところに参画すべきだし、制作部門に女性をもっと数が多くなるべきだと、メキシコのときから言われています。

もう一つ新しい問題が起きています。それは衛星放送など新しい技術の発達です。それによって電波が国境を越える。それをどうするのか。それによって、その国の価値観と異なる価値観が持ち込まれる。もはや世界は一つというくらい、国境を越えた電波が直接家庭に届くという時代が来ている。

例えばジャカルタ会議に参加したときに、テレビをつけるとジャカルタ放送があるのと同時に、ホンコンのスターテレビが見える。アメリカのCNN、オーストラリア放送、違った文化圏のテレビが見える。日本は規制が強いのでまだよその放送が見られない部分があつて気がつかないのですが、マスメディアは国境の壁を越えています。

ベルリンの壁の崩壊をもたらしただけのもの一つに、西側のメディアが東側で見られ、国家が宣伝しているものと違うではないかと民衆が気づいたことがあるといわれています。民主主義とか、物質的な豊かさとかに対する憧憬がベルリンの壁を崩したといわれます。女性問題に関しては、積極的評価だけでなく、違った価値観が持ち込まれるがよいことなのかと国によってはいわれる。特にイスラム社会では、衛星放送のパラボラは取り壊されたり罰せられたりしています。違った価値観を持ち込まれたら困ると。

皆さんも何気なく週刊誌を持って他国にお出でになることがあると思いますが、国によって



は、あれは空港で見つかったら逮捕されかねまじきものがあります。日本の週刊誌は真ん中にはまともな事が書いてあっても、グラビアにはヌードが載っているでしょう。ヌードは禁止の国が多いのです。ヌードを所持していることが刑罰の対象になっている国もあります。飛行機会社によつては、週刊誌を空港で捨てさせるところもあります。

アメリカでは日本から進出している企業で、応接間のテーブルに昔は何気なく週刊誌を置いていたけれど、今は少なくなっています。アメリカ人のお客さんが、それをバラバラと見たら会社の品性を疑われるので、やめている所が増えていきます。

ボルノグラフィの対象に女性がなっているという問題もあります。その問題と、言論の自由という問題をどう考えていくか、これは非常に難しい問題を含んでいます。言論の自由といっているが、無制限の自由をいっているのか。女性の人権侵害と言論の自由はどこで折り合いをつけるのか。

## 開発と環境保護の矛盾

その次は、環境保護に女性が活躍しているのに、それが評価されていないということが取り上げられています。

途上国は環境保護に敏感ではない。それよりは開発に重点を置く、ともいわれます。開発の権利があると考え。開発の権利はしばしば環境保護と衝突する部分があります。途上国はそれに対して、今までの先進国の成果パターンを改めるべきだといいます。アメリカで一人の子



どもが消費する資源は、途上国で五十人の子どもが消費する量に等しい。今や改められるべきは先進国型の消費パターンではないかと、途上国では問題提起しています。これはいつも衝突しています。

ざっと述べましたが、いずれも一筋縄ではいかない。いずれもNGOフォーラムで出て来るテーマで、皆さんもNGOフォーラムに参加されると思いますが、そこでも物事の一面からだけでは見られない部分を含んでいることを知っておかれたほうがいいと思います。

### 国連の流れを反映する北京会議

もう一つの流れの整理をしますが、ここ数年の国連の会議と、北京会議との関係です。一九九二年国連環境開発会議、九三年が世界人権会議、九四年が国際人口開発会議、九五年、今年が社会開発サミット、これと北京会議の関係ですが、環境、人権、人口、社会開発すべてが北京会議になだれ込むと考えていたのだと思います。

今度の行動綱領を作る過程でも事務局はそのことを非常に意識していて、この流れを皆女性会議に結集しようではないかと言っています。

この環境とか人権とか人口とかは地球レベルの問題で、一つの国だけで考え、解決するわけにはいきません。こうした問題が、取り上げられるようになったのは、東西対決がなくなったことの大きな成果の一つです。それまでは地球規模の問題を取り上げようにも、思想信条の違い、冷戦構造が邪魔をしまして、取り上げられなかった。国連はこういう問題こそ取り上げる

べき問題だという認識はあったのですが、できなかったところがありました。

冷戦構造が崩れて、いよいよ地球規模の問題に取り組むことができるようになったというところで、このところ立て続けに重要な会議が毎年のように行われているわけです。四十年来、溜まっていた問題がここでドツと出たのです。今までやらなくてはならないのに手付かずだったものが、やっとできるようになって「それならやっちゃおう」と、ここになだれ込んでいます。そう思っていた方がいいと思います。

### 先べんをつけた世界人権会議

世界人権会議が九三年にありましたが、これはまるで女性会議みたいだといわれたくらい、たくさん女性の女性に参加し、女性問題が取り上げられました。

ここでいわゆるヒューマンライツという言葉の前に、わざわざウイメンズ・ヒューマンライツと、"ウイメンズ"をつける。人権という言葉の中には、本当は女性の人権も入っている。それを承知でわざわざウイメンズ・ヒューマンライツといい始めたわけです。それはただ人権といったら、女性の人権が埋没してしまうということで、「女性の人権」とわざわざいうのです。人権の問題を考えるとときには、女性の人権という視点を必ず一項目入れて考えようということになっています。最初に申し上げたように、女性問題は人権問題であるという認識の原点にある問題なのです。

そのときウィーン宣言及びウィーン行動計画というのが出来ました。この中に女性の権利と



いうのがどういふふうにいわれているかという点、例えば女子差別撤廃条約などを具体的に履行するようにと、女性の人権への留意のために各国はその部署の人間を教育訓練するようとか、条約の個人請願権の問題とかが書かれています。

私も世界人権会議には政府代表で行ったのですが、印象的だったのは、特にNGOフォーラムに参加している人の七割近くが、女性だったことです。

NGOフォーラムが活発に行われて、女性の人権をいろいろな側面からとらえていました。さっきの暴力の問題、戦時下の暴力、慰安婦の問題もそのとき活発に取り上げられました。拷問から生き残った人が体験を語るとか、女性の売買春の実体など、人権に関するNGOのワークショップは相当激烈でした。参加した日本のNGOの方が、いたたまれなくなって逃げ出してきたのを覚えています。

日本女性も相当覚悟して行ったほうがいいと思います。「男性が売買春を行なっているんだ」と言っても、だれも容赦はしてくれません。「なぜそれを見逃しているのか」ということは直接問いかねられますし、「どういう反対運動をあなたはしているのか」ということを問われるし、NGOに参加した方はしんどい思いをしたようでした。

「政府が悪い」と言うことは構わないし、いくら言ってもいいけれど、それだけでは国際社会では通用しないと思います。

人口会議については、私は原ひろ子さんや樋口恵子さんたちとネットワークを作ってNGOをやりました。人口会議と女性との絡みで出ている問題は三つくらいあります。

一つはリプロダクティブ・ライツです。最初、「再生産の権利」と訳されたのですが、今は



“性と生殖に関する権利”と訳すようになっていきます。女のからだの問題です。

人口問題というと、今までは数でとらえられて、子どもの数は何人であるとか、人口伸び率は何パーセントがいいとか言われていたのですが、女性の本来持っている性と生殖の権利を尊重する、男性もそうですが、個人のところから子どもの数や人口を発想していこうという考えなのです。新聞に何度も取り上げられましたね。中絶の権利があるとかないとか、そのことを含んでいるのです。

## 「ザ・ファミリー」から「ファミリーズ」へ

北京会議でもこの話が出てくると思います。カイロで作られた人口と開発会議の行動計画におきましては、非常に漠然とした、リプロダクティブ・ライツは認めるが、その中にどの程度のものを含むのかは曖昧な部分を残しています。中絶をどう考えるのか、安全な母性をどう考えるのか。言葉の問題でいろいろやり取りがありました。

もう一つは家族ということです。人口と家族というのは、どういう関係があるのかというと、たとえば性教育、若者の性をどう扱うかに対して家族の関わりがありますし、家族というのが、ザ・ファミリーというのと、ファミリーズという言い方があります。ザ・ファミリーというと伝統的な男と女と子どもがいる家族、ファミリーズというと多様性があり、同性同士、単身者の家族、血縁のない家族も含みます。その家族の多様性をどう考えるのかも提起されました。

もう一つここから出てきた移住労働者の問題です。今日働くというのは国境を越えて働く場





合があります。日本にも外国人労働者がいますね。そういう人に家族の呼び寄せ権を認めるかどうかも議題になりました。カイロ会議の議論と北京会議の議論と同じであるかどうかかわらない部分がありますが、家族の呼び寄せ権を認めるといふ国と、それは困るといふ国との対立がはつきりするのではないかと思います。

日本の場合、働きに来てゐる人の中に、いわゆるエンタテイナーとして風俗営業で働いてゐる女性の問題が提起される。暴力のところで移住労働女性に対する暴力の問題が出ています。移住労働の問題について、特に熱心なのはフィリピンです。どこの会議でも提出しています。私たちが知っておかないといけないのはフィリピンから働きに来てゐる女性の八五パーセントがエンタテイナーというカテゴリーで来ている。これは異常なことで、マニラで見たテレビでもこういう問題提起が行われていました。これも女性問題として、国境を越える問題として、特にNGOでは問題提起されると思います。

それから最後に一つ、社会開発について触れておきますと、社会開発サミットが今年三月に行われます。現在、地球規模の問題を見た結果、経済開発の方はずいぶん進んできている。特にアジアは経済的には発展している。しかし、社会の方はちつとも発展していないではないか、という認識によって、社会開発サミットが行われることになったのです。これはサミットですから、総理がお出ましになると思いますが、ともあれ、三月の十一、十二日にサミット、六日から会議が行われます。

ここで取り上げられるのは、貧困、雇用、社会的統合、男女平等、最貧国といわれる国の問題を重視すべきということ、それから構造調整政策を見直すこと、そんなことが今のところ課

題になっています。その結果を含んで九月の女性会議があるということです。

## 期待される N G O

最後に N G O の役割ですが、地球規模の問題を解決するためには、政府の努力だけではだめだという認識になっています。それは東西冷戦構造の崩壊がもたらしたメリットの一つであると思います。以前は政府、政府、でゴチゴチだったんですね。それが政府だけでは不十分だということが認識されるようになり、具体的には今まで政府間会議に参加できる N G O は、経済社会理事会に諮問的地位を持つ N G O に限られていたのですが、そうではない N G O も登録して認められれば、政府間会議に参加できるようになりました。

それですと N G O の政府間会議への参加の拡大ということが行われています。北京会議においてもそうです。私が今までキャッチしているところでは世界人口会議ではおよそ二千の N G O の参加が認められた。北京会議でもそのくらいの数になると思います。政府間会議の参加が認められるということは、どういうことかという点、オブザーバーの資格で会場に入れることです。問題になっているのは会場の広さがどのくらいあるかということです。千も二千もとても入らない。しかしできるだけたくさんの N G O を、という気持ちはみんなにあります。

もう一つは N G O フォーラムを、政府間会議より先に開催する。北京でもそうです。 N G O フォーラムは八月から始まるわけです。そこで意見を集約して、政府間会議に提出するという形で N G O の存在を印象づけ、コミットしていくという形があるわけです。



過去の三回の会議では、大層活発に行われたようで、人権会議の場合もNGOからの意見はものすごく活発でした。あの時の大事なテーマの一つは人権高等弁務官を認めるかどうかというところで、そのアイデアはNGOから出たということでしたが、これは認めないという国も途上国に多く、日本の政府代表が支持するというスピーチをしたところ、NGOの代表の女性たちが近づいて来るのです。何を怒られるのかなと思うと、「どうもありがとう。日本が人権高等弁務官を認めてくれて」と、感謝されたのですね。なるほどNGOのロビイングは意見をまとめて出していくと同時に、いろいろな形で政府代表に圧力をかけたり、力を与えるのだと経験しました。

人口会議のときも、私たちは、例えば「リプロダクティブ・ライツ」の翻訳を「再生産の権利」だなんて、女は子どもを生む機械みたいな言い方をしてくれるな、ということを行いました。

NGOの役割を国連自身は大きく認めていますし、政府も気が付いてきているだろうと思います。日本はNGOとの関わりがうまくいっていない国だといわれますが、少しずつ良くなっていると思います。

後にご質問がございましたら、なさってください。

Q 日本の政府代表の方と、NGOの話し合いの場はあるのでしょうか。

A 事前にですか。日本は政府代表が決まるのがいつもぎりぎりなんです。代表とは限らない



のですが、政府とNGOの話し合いの場はいろいろ持っています。女性会議も現在国内委員会というのができていまして、そこにNGO部会というのがありまして、そこはかつての婦人問題有識者会議のメンバーが入っているのですが、そこが主催してNGOとの話し合いを何回か行なっています。これから行う予定です。

Q その記録は、婦人教育会館のウィネットで見られますか。

A 記録はとっているでしょうか。良く知りません。NGO部会の意見交換の場で、発言したり、聞いたりなさるとよいと思います。ご自分の団体でご相談下さい。

Q NGOフォーラムで意見を集約して、政府に提出するということですが、各国のNGOが行く前にまとめて政府に出すのでしょうか。その時のフォーラムの出席者が出すのでしょうか。

A 後者です。国に制約されるのではなく、国を超えて、問題に関心のある人たちがこの指止まれ方式で集まり、だれかがリーダーシップを取って、ワイワイガヤガヤ議論して、意見をまとめて出すという方式を取っています。今度も中心人物になるだろうという人は、ベラ・アブザックという、アメリカの下院議員だった人です。いつも大きな帽子をかぶっていますから、帽子をかぶった人を探すといひです。ウイメンズ・コーカスというのを作ってそこで皆が意見を出し合って、何項目かまとめて出したりしています。



Q 日本の政府代表ですが、スウェーデンでは首相が出たということですが、日本としては総理が代表で出たほうがいいのか、女性が出たほうがいいのか、興味のあるところです。政府の代表団として、ナイロビには女性国会議員が全員行けたと思うのですが、今は女性議員がかなり多いので、全員の議員に行っていたきたいけれど、どうでしょうか。

Q 前者については、どうお考えですか。私もそこが一番考えどころだと思っています。すでに北京会議の首席代表として総理に行つてほしいという要求が出ています。しかし、男性でいいのかということ、九月にだれが首相かわかりませんが（笑）、そのときに女性の総理ということとはまあ考えられない。すると総理が行くのがいいのか、その時間内に入っている女性、今なら田中真紀子さんですが、その方がいいのか、いろいろな選択があります。

後者については、女性議員でお出でになりたい方は全員お出でになれると思います。これまでもそうでしたし、これからそうです。

Q 総理府の出した国連婦人の十年をまとめた本を持っているのですが、少ないですね。顧問といつても一人しかわからないし、その方しかないのかなと思つてしまいます。

A 議員顧問団といつて、議員は別なのです。議員は行政ではなく立法の府ですから。つまり政府代表団は行政府の代表としてお出でになり、議員は顧問団としてお出でになるわけです。ナイロビも皆さんずいぶんお出でになりました。しかし、非常に熱心な方と、率直に言えばサ

\*\*\*\*\*  
ファリのほうに熱心な方と（笑）いらつしゃいました。

Q Iの女性のマスメディアの活用の不十分というところに関心がありますが、日本でこういう形で話し合っている、ということがあれば教えてほしいのですが。

A 私も関心がありますが、議論がどこで行われているのか聞いていません。私たちも準備委員会に出ますが、こういう立場を取っていいのかわからないこともあります。原則は言論の自由を守ることですが、一方で女性の人権との関係でいくと、どうすればいいのでしょうか。

Q 報道が規制されていることもあって、日本がどういう位置にいと報道されて、世界に認識されているか、日常的にわかりにくい。どんなふうに見られているか自覚がないと、国内だけで議論しても済まない大きな課題かと思います。

A この問題自身が新しいのです。メキシコ以来、ポジティブな女性像を描けといわれているのですが、問題の複雑さまでは当時はなかったのです。環境も悪くなっているのです。女性を性の対象にするということもあるし。どういうふうにか考えるのか難しい問題だと思います。

斎藤 今のことについて補足させてください。この問題はいろいろなグループで討論しています、いわゆる五二団体、国際婦人年連絡会も部会を設けてやっています。北京会議に向けて



も討論を重ねています。この前の東アジア女性フォーラムでもその部会がありました。ご希望でしたら、研究している方々を紹介いたします。

A 今、どういう議論になっていますか。

斎藤 マスメディアで報道に携わるのは、コペンハーゲン会議までは男性が九九パーセントでしたが、今は九二パーセントと言われていますね。女性は八パーセント伸びましたが、主要な舞台からは離れていることも多いし、女性を実際の報道者の軸におくことを一番の問題にしています。

マスメディアの差別的な表現についてはいろいろなグループで告発を続けてきたので、前ほどは無制限に野放しではなくなりました。二十年前に比べて、考え方も変わってはいえると思いますけれど、基本的な体質の古さはあると思います。

経済大国の日本で、メディアの大部分を男性が押さえていることは、国際的には知られていないことです。現地に行かれたらおわかりだと思いますが、各国のテレビ局のクルーはほとんど女性なんです。日本だけがナイロビまではほとんど男性でした。今度はどうなるか。器材も軽くなりましたし、女性の撮影班も大幅に増えましたが、外国のように百パーセント女性ということはないと思います。ただかなり登用するとは思いますが。報道の水際に女性がいないということは問題です。普段から女性問題を勉強している人がいないと、突然カメラをのぞいても、適切な作業はできません。女性たちで、このことをもっと発言していかなければ、と思います。

ます。

有馬さんはナイロビまではジャーナリストの立場で、日本の女性ジャーナリストたちをたいへんサポートされたのです。ジャーナリストの中には競争意識が激しく、ご自分の手の内を見せない方もいらしたのですが、有馬さんは情報を開放して、若いジャーナリストが何を見るべきか、毎日ブリーフィングしていらして感心しました。今回そういう方がいらっしゃるか、心配しています。

Q 災害について、今まで技術に頼っていた神話が崩れて、質問が出れると思うのですが。そういう問題も学習したほうがいいでしょうか。

A 九月まではどうでしょう。三月の会議には各国からお見舞いをいわれると思います。ウイーンの人権宣言は出版されているでしょうか。人口のカイロの宣言行動計画は翻訳が進んでいると思います。ウイーンの宣言より、女性問題に関してもっと近いと思います。もし出たら一読されると役に立つと思います。代表代理で出られた阿藤誠さんが「女性会議より女性会議らしいものができました」と言われたので、そうかと思いました。

Q ワークショップの一覧はいつごろわかるのですか。

A 締切りは四月ですから、まとまったら総理府に来ると思います。





中山 マスメディアが男性ばかりだという話が出ましたが、もともと古い社会は議会だと思っています。皆さん外から見ているだけでおわかりにならないと思いますが、本当に女性議員が出ていかなければ日本の社会は変わらないと思います。私が理論的に話すと、最終的に「男の馬鹿と女の利口は一緒だよな」と逃げられます。これはセクハラです。喧嘩してはいけないので、我慢しながら女性の施策を変えていかなければと思っています。難しいこともいいけれど、自分の地元から変えないと男女平等は有り得ないと思います。

A 貴重なご意見ありがとうございます。

斎藤 私どもの方へワークショップの持ち方の質問が各地から来ているのですが、今年の特徴としては、自治体が、自前のワークショップを持たなければまずいみたいになくさんお持ちになるのですが、その内容がどうも心配だということで、私どものメンバーで調べている人がいます。一覧表を作ったところで問題提起したいと思います。いろいろな自治体で助成金を出して募集しているのですが、必ずしもすべてオープンというわけではなく、選挙に役に立つ地域の有力女性にまず声がかかってチームを組むということがいまだに行われています。さつき足元が大事だといわれましたが、そういうところを改めていかないと、政府の悪口を言っても、「では、お前たちは何をしているのだ」と問われることになると思います。横浜や神奈川、沖縄などの、日常、女性運動の活動が盛んなところはいいものが出るのではと期待しています。

\*\*\*\*\*

A 東京では区長などの推薦らしいですね。

斎藤 そうなると選挙に有利な方が出るということで、今までも問題になったことです。その後の運動が足らなかったと思っています。

A へあごろ～さんでワークショップを調べていらつしやるのは本当に素晴らしいことで、さつきご質問の方もどこかで情報をいただければいいのですが。

斎藤 この「北京会議への道」のセミナーは二月で終わるのですが、その後でぜひ皆さんともう一度、具体的な情報について話したいと思っていますし、調査を大規模にやりたいと思っていますので、結果を時々刻々お知らせしたいと思います。

A 横浜市のPRをさせていただきます。横浜市は募集要項がいろいろなところにおいてありますが、論文を書いていただく。金額は半額、市が出すということで十五人募集しています。横浜市女性協会でも北京会議へ向けての講座が始まります。最初は私が話しますが、後は女性の暴力、リプロダクティブヘルス、中国現代史、そういうのを十回程度でやることになっています。モンテラ事務局長も、北京会議は最後の到達点で、そこにいたるまでの過程が大事だとおっしゃっています。では北京でお目にかかりましょう。(拍手)

## 北京会議NGO会場はファイローに決定

諸説乱れとびましたが、六月八日、中国組織委員会（COC）が大幅に譲歩したので会場をファイロー（懷柔県）に決定したと、NGOフォーラム事務局長が発表しました。

合意の内容は

1. 北京市内に、北京レクリエーションセンターとは別にサテライト会場を設け、NGOメンバーの国連に対するロビー活動の根拠地とする。
2. 登録申込者全員（三万六千人）の参加を受入れる。
3. 登録者はすべてビザを取得できる。
4. ファイローの四十二ヘクタールの土地がNGOフォーラムに提供される。
5. 申し込みのあつた五千の活動（ワークショップ、展示、交流等）がすべて実施可能になるよう、COCとNGOフォーラム事務局は共同で努力する。
6. 参加者の宿泊地は北京でもファイローでもよいが、COCは、北京からの移動の必要がないよう、ほとんどの人がファイローに宿泊できるよう努力する。
7. ファイローで夜のイベントの開催が可能となるよう、特別な野外講堂が建てられる。
8. COCは、ファイローの内外を結ぶためのシャトルバスを用意する。
9. COCはNGOや報道陣のために十分な国際電話回線を準備する。
- の九項です。

スパトラ・マスデイト議長からは、「これは世界中の女性たちが多大な努力をした結果です。全員でフォーラムを成功させるようさらに努力することを希望します」と世界の運営委員にメッセージがありました。

今回の事態を心配して、〈へあくら〉ではニューヨークにも北京にもたたびFAXを入れ、アジアで最初の世界女性会議をとにかく成功させるよう申し入れてきましたが、一件落

着したことを、本当にうれしく思います。

## ファイローは建設ラッシュ

六月十一日、現地を視察した共同通信、松本侑壬子さんは、「空港から車で三十分のファイロー（懷柔県）は、北京市の一部（県と市の関係は日本とは逆）であり、郊外の地方都市という感じ。森の中の淑女たち、みたいなことになるのでは、との予想は全くはずれて、のんびりした親しみやすい雰囲気、りっぱな町でした。何人かの町の人にも聞いてみましたが、一様に「NGO会場になってうれしい。歓迎する」とのことでした。

とにかく町じゅうは至るところで新築・改築ラッシュ。できるだけのことは精一杯やろう、とのエネルギーは感じられました」と、報告してくださいました。

松本さんは張静さんにも会ってくださいましたが、張静さんは「急に会場を変更することになり、北京市内と近郊のあらゆる場所を探したけれども、ファイローにまさる場所はなかった」と、この間のご苦勞を述べられたとのこと。婦女聯も、世界と中国政府の板ばさみの中で、たいへん苦勞されたようです。

（あこらツアー）の中国側旅行代理店はじめ現地の人びとは、



宿舍にあてられる住宅団地も改装中



新築中の建物が随所に



このホテルも内装を改築中



右側が1700人収容の映画館。大会議場用に改築中。

前々から、ファイローは山紫水明、空気もきれいで、北京市内よりはむしろNGO会場にふさわしいのではないかとこの意見だっただけに、今回の決定を喜んでいます。敷地四十二ヘクタールは、予定されていたスポーツセンターの四十ヘクタールより少し広め。千七百人の映画館を大改造、中学校の五十人教室を二十、ワークショップ用に改造するほか、ホテル・会議室・通信設備等を新設するためパワージャベルが

林立している。中国は威信にかけてもやりぬくだろう、というのが、現地を見た人びとの一致した意見です。  
 〈あごろ〉では、この間、できるかぎり現地情報を集め、ファイローに決定するだろうと読んでいましたので、ホテルも、開会式までは北京市内、それ以降はファイローを手配しましたが、予測したとおり、ファイローで夜も交流がはかれました。楽しみです。  
 (写真提供・松本侑壬子さん)

# チエチエンで何が起ったのか

——息子を取り戻しに行つたロシアの母たち——

寺沢 潤世

遠いロシア。その中でも遠いチエチエン。大変なことが起きているようだと  
思いながら、またか…と見過ごしがちな私たち。

五月二十六日、その現地から戻られた寺沢潤世さんをお迎えし、ビデオをまじえ  
たまま面白いお話をうかがいました。

斎藤千代さんの「見えない戦争」をお読みになった方はご記憶かと思いますが、私は日本山  
妙法寺の僧侶としてロンドン、インドなど各地で平和運動を続けてきた者です。

湾岸戦争の時は世界各国の平和運動家とサウジアラビアから二キロ入ったイラクの国境にピ  
ース・テントを張り、人間の盾となつて湾岸戦争を阻止しようとした。

湾岸戦争は、アメリカが軍事力を縮小するか拡大するか岐路で起つた戦争で、もし阻止  
できればアメリカも方針を大転換するはずだった。それがついに開戦となり、旧来と変わらな  
い方針に逆戻りしてしまつた。せっかくのグッドチャンスが、千載一遇の歴史転換の時期がハ

イジャックされてしまった。そういう口惜しさで、空爆を見つめていました。

それと平行してヨーロッパ大陸では、欧州統合、東ヨーロッパの社会主義体制の転換、その中でソ連は、湾岸戦争を阻止できなかったゴルバチョフが力を失った。いよいよ内側から共産党の独裁体制が音を立てて崩れていく時期に当たり、湾岸戦争のイラクとモスクワの間を行き来するようになりました。

一九九一年の八月、モスクワでヨーロッパの非核運動——ENDという平和運動団体、これは八〇年代のヨーロッパの反核運動を大きく盛り上げていく推進役になったビジョンを掲げた平和運動だったのです——それが初めてモスクワで、冷戦当時の一番の膝元で開かれることになり、それに参加しておりましたところ、突然、ゴルバチョフさんがクリミアに避暑に行っている間に監禁されてクーデターが起きたわけです。ロシア連邦政府、通称ホワイトハウスのバリケードに私も馳せ参じまして、太鼓を打ってお祈りをしてました。いよいよソ連が大変な事態になった。そういったモスクワにとどまって今日に至りました。

いまソ連に活動の拠点を定めて四年になります。今回私が日本に帰った一番の目的は、チェチェンで起きている戦争の実態を知らせたいということです。私はチェチェンに今年の三月から五月まで平和行進したり、戦場の村々をお坊さんだけで行脚したり救援活動したりして、チェチェンの戦争の有りさまをつぶさに見、チェチェンの人たちの苦しみの声、訴えを聞いてまいりました。

チェチェンの人たちに、「私たちの真実を、苦しみの声を世界に訴えたい」と、いつも聞かれました。今はこの声をお届けするのが自分の役目だと思います。

もう一つは、私は仏教者ですが、一市民としてヨーロッパやアジアの本当の平和を作っている世界像を求める一人として、このチエチエンの戦争が起こった時にどうやって反戦平和行動を起こしたか、その中でどういう事態に直面したか、その経験がロシアでどういう意味を持っているのかも考えていきたいと思っています。

## モスクワに入つたチエチエン人たち

まず最初にチエチエンの背景ですが、戦争の起きる前、どういう経過で戦争が起きたか個人的な関わりも含めて、かいつまんで話したいと思います。

実は戦争が始まる前から、度々チエチエンに行く機会がありました。ゴルバチョフの失脚、共産党が非合法化され、ソ連が消滅して共和国が独立していくという、誰もが予想しなかった急展開が起き始めましたが、それはそのままあの国の体制が音を立てて崩れていくことになった。それを目の当たりに見てきたのですが、ほとんど法律が機能していない状態になった。もともとソ連は法治国家でないといわれますが、全くのカオス状態になり、経済的にも社会的にも国家の法のシステムが機能していないという混乱が現れます。その中でチエチエンのマフィアというのが社会現象として現れます。

モスクワで一般市民の目から見るとチエチエン即マフィア、チエチエン即犯罪者、コーカサス人即ならず者という、偏見に満ちた考え方が大勢を占めていますが、そのモスクワに、新しいタイプのチエチエン人が入り込んできます。



その中で一仏教僧として私はモスクワの街を太鼓を叩いて歩いたり、市場に托鉢にでかけたりして修業していました。見ず知らずの仏教僧にとっても温かい心をかけたり、野菜や果物をお布施してくれたり、そういう人は皆コーカサスの人なのです。そういう人はほとんど回教徒なのですが、特にチエチェンの人は親しげに話しかけてくる。そして兄弟づきあいをするほどの友人ができました。

そういう人たちは田舎の山奥から出てきた人たちですが、モスクワがますますヨーロッパ化していく中で、チエチェンの人は独特の結束力がありまして、それを利用してモスクワの混沌とした経済の中で食い込んでいくわけです。マフィアはほとんどモスクワの経済を牛耳っていますが、その中に食い込んでいく。田舎から出てきたチエチェンの若者は、出稼ぎのような形でいろいろなホテルをアジトにして活動していた時期でした。今は消えてしまいました。

## 心温かなチエチェンの人びと

そのチエチェンの人たちの人柄ですが、異教徒である仏教僧にとっても親しみを込めて話しかけてくる。そして何のてらにも偏見もなくいろんな物を施してくれる。彼らの行動様式を見ると、とても強い精神的結束力を持ったグループで、例えば年長者に対しては絶対的な尊敬と服従を示す。弱い者に対しては人情味あふれた優しさを示す。きらびやかな資本主義の消費社会に突っ走っていく中で、いつまでも自分の文化・伝統、その根底にある宗教的な生き方に對しては、はつきりと足を地に着けている。

不幸なことに私と兄弟のようなつき合いをしてきた親友が、買ったてのスポーツカーをぶつ飛ばして事故に遭い、八か月ほど生きたのですが突然亡くなってしまいました。まだ二五歳の青年でした。その人がいつも故郷のチェチェンを褒めたたえていたのです。「雪を頂いた山があり、きれいなせせらぎがあり、緑豊かな森があり、皆が歌ったり踊ったりするんだ。いつか一緒に行こう」と言っていました。

病院にはいつて「死ぬところを助かったのだから、もうこれからはやくぎな生活から足を洗って故郷に帰る。案内するから一緒に行こう」と約束を交わした矢先に亡くなってしまいました。それでその約束を果たすために、遺体と一緒にチェチェンに足を踏み入れたのが最初でした。

空港に着いて驚いたのは三百人の人が空港でその遺体を待っているのです。そこからコーカサスのふもとの村まで延々と自動車が遺体を運んで、翌日からは村を挙げて一人の青年の弔いをするのですが、一週間延々と続くのです。

向こうは寿命が長くて百歳とか百二十歳とかいう人がたくさんいるのですが、そういう長老が全部出てきて、老いも若きも一緒に一人の死を悲しみ弔うのです。毎日お祈りがあつて、哀愁を帯びた祈りの歌を歌いながらグルグルと輪を走ります。また村中の男が地面を足踏みして、ズンズンと地鳴りがする程でした。どれもこれも心を込めた美しい儀式でした。山麓まで野辺送りがあるのですが、やはり村中の男が泣きながら担ぎ、村中の女が見送るという、今の時代では見られない古いしきたりのまま、宗教的な生活が村の共同生活に生きている。一週間村中の人に食べ物を施すのです。仏教でも死者のために功德を積んで回向するという考えがあります。

すが、遺族は村中のどんな人も拒まずに迎えて羊肉や馬肉を振る舞います。

そういつた生き方を見て、深く胸を打たれ共感しました。こんな民族が今の時代にあったのかという驚きを感じました。そういうチエチエンの人たちのおもしろさは、よそ者、全く違った文化の人、違った宗教、顔、言葉の人に普通は拒絶反応があるものですが、チエチエンの人たちには「来た客は神様のように扱う」という掟があるのです。それは文化的に見ても深い開かれた文化で、施し、死者を心を込めて弔い、どんな異民族も神の子として迎え入れる、そういう包容力豊かな文化こそ、本当の文化であろうと考えました。

それでチエチエンにひかれ、度々親友のお墓参りを兼ねて足しげく通うようになりました。通えば通うほどチエチエンの人たちの豊かな生き方に感銘を受け、一方、民族としての苦難の歴史もまざまざと学ぶ機会がありました。

チエチエンは政治的にいえばソ連崩壊直後独立を一方的に宣言し、ロシア側からは経済封鎖を受けていますから一切の経済援助はなくなっています。学校の校長にしても先生にしても給料をもらっていない。工場は閉鎖されていて、労働者も先生も二年以上給料をもらっていない。もっと驚いたのは確かに武器は氾濫している。公然とマーケットで銃がさばかれています。そういうイメージがあつてチエチエンは犯罪者の集まりで怖くて足を踏みいれられないと思っています。そういう一面もありますが、その奥に古来からの民族の苦難の歴史と、その中で堅持してきた文化をかいま見る機会を得たのは幸いなことだと思っています。

## ロシアの介入を嫌って

そういう個人的なつながりがチエチエンには戦争前からあったのですが、最後に戦争前に訪ねた時にグロズヌイに大きな武装内乱がありました。ドゥダエフ政権に反対するグループとの間に戦闘が起きました。ロシアの報道では小さく報道されたのですが、友人から聞いた話では大きな抗争で、沢山の死傷者が出て激しい市街戦が繰り広げられたそうです。夏の時点です。十一月に反ドゥダエフ側がグロズヌイを陥落させる抗戦に出まして、それが全部ドゥダエフ側の軍によって追い返される。首都占拠が失敗に終わるわけです。

この時、グラチョフ国防大臣はロシア政府の介入をきっぱりと否定し続けました。というのもロシア政府がいろいろな独立共和国に対して、やはり内部対立を利用して国内を分裂させ、武装闘争化していく時には必ず反対派に対して経済的・軍事的作戦指導を、全部ロシア軍でやっているわけです。グルジアなんかいい例です。シユワルナゼ大統領のグルジアは、C I S に加盟しないでN A T O に加盟する方針をとっていました。アブカジアというグルジアの中の地区が独立闘争を始めて、グルジアから独立宣言をして内乱が始まったのですが、始終ロシアからバックアップを受けているわけです。それで国連へ調停交渉を持つていきますが、どうにもならない。最終的にはロシア軍が間に入って戦争をやめさせるといふ形をとる。グルジアはC I S の中に入る。そしてロシア軍に基地を提供するはめになります。それが一つの典型的なパターンなのです。

## 話し合いを拒否したロシア

ロシアが周辺諸国をロシアの勢力下に置くという方針があつて、コーカサスは特に顯著にそれが現れているわけです。チエチエンはそれを嫌がりました。ロシア軍のグロズヌイ攻撃が失敗した時、反政府勢力の中に沢山のロシア兵が入っており、戦車の戦力は全部ロシア軍だったのです。けれどもロシア政府ははっきりと介入を否定し、それによってロシア兵は秘密の契約を結び、契約書は本人は持てないのですが、グロズヌイの攻撃が成功した時には高額の報償をもらえろという秘密の契約が結ばれていたことさえ暴露しました。それでもロシア政府はしらを切つて介入を否定し続けました。

やがてエリツイン大統領がアフガニスタン侵攻以来の大量の軍勢力をチエチエンの国境に集めました。ドゥダエフ大統領は「ロシア軍がチエチエンに入れば宣戦布告と見なす。武力によらないで話し合いを持とう」と提案しますが、ロシア政府は全部けつてしまいます。ドゥダエフ政府を交渉相手などと絶対に認めない。内乱で二分した政府軍側と反ドゥダエフ軍側、双方ともに非合法の武力集団と決めつけまして、最後通告で武装解除を命じます。そして、一般ロシア市民——民族的にみて白系ロシアですね——の生命の安全を確保する必要があります。一方的に独立したドゥダエフ政権は認めない。そしてロシアが採択した新憲法の枠内にチエチエンを取り戻す。この三つの大義名分の下に軍をチエチエンに侵攻させます。最後通告で一方的に非合法武装集団は武装解除しなければならない。そして白系ロシア人の生命財産を守らなければ

ならない。そしてチエチェンを再びロシア憲法の枠組みの中に取り込まなければならぬ。それがロシア軍の侵攻の大義名分で、話し合いの申し出を一切断りました。

## 良心的ロシア人のためらいを踏みにじつて

大量の軍がチエチェンに侵攻したときに、村人たちは素手で立ち上がった。「なぜ我々の国に入ってくるのか」と抵抗しました。一時期はかなりの軍隊が素手の民衆の抵抗にあつて、進軍を中止させられた所もありますし、一部のロシア軍指揮官の中には、「この侵攻の大統領令は憲法違反だ」と言い切る指揮官もいました。

憲法上、ロシアの国防軍は対外侵略に備えた軍であり、国内問題を解決するためには軍を動かさないことになっています。それで良心的なロシア軍リーダーの中には、チエチェン侵攻をはつきり批判し、命令に服従しない人もいましたし、現地の指揮官にもそういう人がいました。無抵抗で群がる民衆に対しても「ロシア軍はあなた方を撃つことはない」と約束するロシア兵もいました。

しかしこのチエチェン戦争を画策した中心勢力であるクレムリンの国家安全保障会議に、エリツィン大統領が「チエチェン問題を解決するためには、もう、あらゆる手段を取ってもいい」という大統領令を出し、大統領は鼻の手術で病院にひっ込んでしまったのです。その間に大々的な侵攻が始まってしまったのです。

恐らくエリツィン大統領は、一週間で片がついて、病院から出るときにはもう戦争が終わっ



ていると考えていたようです。しかし、チェチェンの反撃には目覚ましいものがありました。一方ロシア軍の作戦は全くずさん極まりないので、グロズヌイに侵攻する、それから空爆が始まる、その戦略は国防軍側と内務省軍側との間で全くお互いの連絡さえできていなくて、たくさんの人が同士討ちで殺されました。空爆で爆撃を受けたのがロシア軍だったり、当初は戦車でグロズヌイに入った人は実戦経験のない人だったり、機関銃の訓練も一か月くらいしか受けていない兵士たちが真つ先にグロズヌイに送られてしまった。戦車に乗った人たちもグロズヌイの地理さえ知らない。そんなふうにはグロズヌイ侵攻が始まり、ほとんど全滅した。生き残った人はほとんどいない、そういうずさんな作戦が行われたと言われています。

チエチエンに押しかけたロシアの母たち

それに驚いて一日も早く片をつけるために無差別じゅうたん爆撃が始まりました。その間、驚いたことには、ロシア下院議員に設けられた人権擁護委員会の議長——セルゲイ・カバロフという、サハロフ博士の跡を継ぐと言われるソ連時代の反体制派として長い間監禁されていた人——が、激しい空爆下のグロズヌイの大統領の建物のバンカーにずっと人びとと一緒に生活しながら、空爆の様子を世界に伝えてくれました。まことに決死的な英雄的な行為でした。彼の声が逐一ジャーナリズムで報じられ、人権を無視したじゅうたん爆撃が行われているグロズヌイの様子をなまなく伝えてくれました。

その中で一番心配をしたのは、息子を戦場に送られたロシア兵士のお母さんたちでした。膨



大な戦死者が侵攻で出たということが伝えられますが、政府公表は全く正確な数が発表されません。そんな中でお母さん方は息子の安否を気遣って、モスクワに集まり始めて、連日ヘロシア兵士の母親の会という事務所を駆けつけて、情報を取ろうとするのですが、政府側の発表は一切ない。国防省を訪ねても何も教えてくれない。

その時にチェチェン側のほうから、どういう戦死者が出たか、戦死者の身分証明の情報を集めてくれたり、捕虜になった人の情報が伝えられます。それでも十分ではありません。身元のわからない兵士の死体が街に散乱し、山に投げ捨てられていると伝えられました。激しい空爆のときはチェチェン国境に、八百人とも千人ともいわれるお母さん方が集まって息子たちの情報を集めようと、あるいは息子がわかれば息子を引き戻すという動きがありました。

## 非暴力直接行動も始まる

一方モスクワでも、戦争直後から戦争の抗議行動が始まりました。中心になったのはヘロシア兵士の母親の会、それから人権擁護委員会、三つ四つの別々の政党主催の抗議行動でした。日本でもそうですが一緒に行動しないんですね、そういうのが十二月から毎週モスクワ各地で行われました。もちろん我々お坊さんも全部の反戦集会に顔を出しました。

反戦抗議行動というのはたくさん人が集まって、いつも同じメンバーの顔、母親の会、人権団体、民主兵士の会、政治家の党首などが演説をする、その形態だけです。人数は多くて五百人。たいてい百人、二百人で、それ以上にはなりません。寒いこともあるのかも知れませんが。





こういった反戦行動ばかり繰り返しているうちにインバクトがなくなってきた、こういう形だけではどうにもならないと、少人数でやれるシンボリックな非暴力直接行動——それは市長の許可もなくやるのです——が始まった。赤の広場で、たくさんの人の前でダイ・インをしたり、警察が来る前にシュプレヒコールで「チエチェンの戦争をやめろ」とか「皆殺し戦争をやめろ」とか、大声で叫ぶ。演説だけでなくヒューマンチェンをしてみるとか、クレムリンの前の無名戦士の墓に永遠の火がともっていますが、そこに花を持って行って献花をします。それは許可はいりません。自然発生的な集会になります。その場所でヒューマンチェンを作ってクレムリンの膝元でシュプレヒコールをあげたり、ダイ・インをしたり、ゲリラ的非暴力直接行動をしたりしました。またイギリスのクエーカー教徒たちのイニシアティブでヘロシア兵士の母の会＜が中心になって、国会の前でピケを張ったりしました。

ばらばらにアジってもインバクトがないから、ウーマン・イン・ブラックという行動も始まった。ご婦人が黒い服を着てじつと十人も二十人も国会議事堂の前に突っ立っている、それだけです、黒い服というのは喪服ですね。死者を悼む意思表示をするのですが、女性だけであるのです。週に一度、国会の前でやる。イスラエルで流行った、女性の非暴力直接行動です。これもインバクトの強い行動でした。

しかし、広範な大衆の反戦運動にはどうしてもならない。激しい空爆が続き、死者の数が増えていく。ロシアの若い兵士の犠牲者が非常に多い。それをロシア政府はひた隠しに隠している。それなのに大きな行動にならない。もちろん人口の七〇パーセントがこの戦争に反対であることは世論調査でわかっています。しかしそれはこの戦争をとどめるだけの世論にならない。

もちろん三権分立の憲法体制の枠外で決められているという現実があります。最高憲法裁判所も——コンステイテューショナル・コートというのですが、実はそこに欠員がありまして機能していない。チェチェン戦争が憲法違反であることを裁判に持ち込むことができない。議会も戦争推進に関与していない。法的なコントロールがもととない国ですが、あらゆるコントロールが全くなく、戦争だけが暴走している。それをとどめる世論が国内に起きていない。

そういう中で最も激しい行動を起こしていたのが、兵士の母親たちです。ある母親は息子を見つめるために戦場に歩いていったのです。バスもなければ汽車もない、戦場を一人で歩いて行ったのです。ロシアの兵士をつかまえて「この子を知らないか」と聞きただして行く。ついに探し当てた息子を「こんな馬鹿げた戦争に出るな、我が家の名折れだ」とその場で引きずり帰ったという武勇談をラジオで聴きました。

## KGBさながらのいやがらせが市民を沈黙させた

大きな反戦行動が盛り上がらないのは、ソ連時代の七〇年間の、あまりにも大きな国家権力の前に、反戦的な行動を起こすことに恐怖感があるためです。共産党の独裁統治の中で、市民として政治発言ができるような土壌が育っていない。それでもモスクワの騒乱の時でもゴルバチョフさんのクーデター未遂の時でも、何万人の市民が広場を埋めるエネルギーはあったのですが、どうしてなくなったか。経済政策の失敗で、生きていくこと、毎日食べていくことに疲れていて、政治に対しても全然希望を持っていない。そういう要因があったと思います。



一例をあげますと、お坊さんたちは毎日十何人で太鼓を叩きます。大きな音ですから目立ちます。赤の広場やクレムリンを回ってそういうことをしますと、警察が来て耳打ちするのです。「お前たちのことは全部当局が調べて監視しているんだ」と脅すのです。そして数日後に、我々のアパートに深夜十二時過ぎに人が訪ねて来るのです。ドアを開けると機関銃を持った重装備の兵隊が五、六人ドタドタと入ってきて、私たちを床に座らせてバスポートなどを調べ始める。そういうやり方は禁止されていて、家宅捜査をするときは市長からの令状がなければならぬのです。拒否する権利もあるのですが、全く無視して、乗り込んで来る。数日するとまたやってくる。

夜中の一時、二時、丑満時です。零下二〇度の寒い中をわざわざ訪ねて来る。三度目はついに堪忍袋の緒が切れまして、真夜中でしたけど日本大使館に電話をかけて「こんな事が起きているけれど、どうしたものですか」といったら、大使館も驚いていました。

そしてついに、私の弟子はロシア人とウクライナ人なんです、バスポート、ドキュメント全部取り上げられて連行されてしまいました。日本人である私だけは日本大使館のお陰で連行されなかった。けれども十何人の弟子は皆連れて行かれた。何をされるかわからない。ソ連時代の恐怖がよみがえるようで、拷問を受



息子の写真を見せて安否を訪ね歩く母たち

けたり、どこかに連れて行かれるような気がしましたので、外人がついていけば変なことはないだろうと私もついていきました。しかし警察の中に入れさせない。外に突っ立っているのも大変なのでアパートに歩いて戻りました。

その連行の理由は、全く馬鹿げたもので、皆さん信じられないと思いますが、モスクワの住民登録をしていないというのです。住民登録していない人はすべてその地区の警察に住民許可証をもらう必要があるのです。学生でも商売でも遊びに来た人もです。住民登録をしていない人は毎日、住民許可としてのお金を払わなければならない。それがモスクワなのです。それがない場合はだれでも十三日間抑留できるのです。こういう馬鹿げた法律を作ったのはモスクワ市長なのですが、ホワイトハウスの騒乱直後にできまして、即発効して、モスクワにいるコーカサス人は全部そういう法律の下につかまって追放されたのです。その法律が私の弟子にも適用されて、ウクライナから来た連中は許可証など持っていないので連行されたのです。

黙っていられなくて民主政党内に手紙を書き、新聞やラジオに発表しまして戦う姿勢を見せました。するとガイダルロシアの党首の名前で、警察署長、モスクワ市長に抗議の手紙が行きまして、お坊さんたちは釈放されて事なきを得ました。そういった口封じの嫌がらせをやるのです。そういうソ連時代のKGBのやり方が、そのままチェチェン戦争後に始まったわけです。

## 立ち上がったロシアの母たち

そういった混乱の中で大衆行動が盛り上がらない。これほどひどい国際法無視のチェチェン



戦争をしているのに、国際社会はほとんど非難をしなかった。侵攻直後から、これはロシアの国内問題だとの声明をほとんどの国が発表した。紛争を武力で解決するのは悪いというリップサービスはこの国でもしますが、何ら有効な手は打たない。「国内問題は早く片づけてくれ」と。世界中どこでも民族問題紛争があつて、もう深入りしたくないわけです。国連も欧州議会も有効な手を打たず、ロシアにフリーハンドを与えていました。それでついにヘロシア兵士の母親の会と、我々お坊さんとで、直接チェチェンに乗り込むしかないと立ち上がりました。自分で息子を取り返すだけでは戦争終結の力にならないし、モスクワでやっていても無駄だ。もつと世間を注目させなければと、自分たちが直接乗り込んで、非暴力の平和行進でチェチェン人とロシア人の間に入つていつて訴えようと。自分たちの母親ですから、ロシア兵も銃を向けないだろうという読みもありました。チェチェンに息子を探しに來た母親たちを、最初から全面的に支援し、身柄を安全なところに移したり、食事を与えたりと、世話をしたのはチェチェンの人たちだったのです。そういうつながりもありました。

三月八日の国際婦人デーに無名戦士の永遠の火に花を捧げて、チェチェンのグロズヌイへの平和行進を發足しました。その行進の名前を「命を慈しむ母たちの行進」と名づけました。これは国内、海外の報道陣からも注目を浴びて、千人以上の人が出發の日にクレムリンに集まりました。それは大きく報道されました。

そしてモスクワからチェチェンに向けて、バスで、ボルガ川沿いの十二の都市をリレー方式で訪ねました。サラトフ、ボルゴグラード、アストラハン、ロストフ、エリスタ、そういったチェチェンの方角に向けて都市を巡って行きます。



これは一般市民の反戦行動として本当に大きく報道されまして、出発した翌日にチェチェンのロシア連合軍の総指令官から手紙が届きました。その手紙には「あなたの方の平和行進がチェチェンに来ることで、その目的とする戦争終結が一日も早く実現するように我々も努力する。あなたがたもロシア軍がチェチェンに要求している要求を、チェチェン側がのむよう説得してくれ」と書いてあり、これには驚きました。

それくらいロシア軍もロシア政府も、この平和行進がどう展開するか関心を持っていました。

## 妨害した秘密警察

ところが我々が、ロシアの戦争政策、民族弾圧、民族皆殺し戦争、人権無視、戦争犯罪と、はっきりと歯に衣着せずに言いますと、逐一ロシアのマスメディアに報道されまして、ロシア政府の態度が硬化し始め、あからさまな妨害が始まりました。そしてロシア政府の内務省の秘密情報部が大きく動いて外から内から攪



乱し始め、チェチェンに行かせないような動きが出てきました。政府の命令で受入れ側の市のはうも「平和行進はこの町に来てほしくない。来ても受け入れない」という宣言が発表され、行くところがなくなります。それで結局チェチェンのすぐ横のイングーシ共和国に向かうことになりました。

イングーシは民族的にはチェチェンと同じで、チェチェンは独立し、イングーシは連邦内にとどまりましたが、この戦争に初めから反対していて、そこまでたどり着けば妨害の手から免れると、汽車でそこに向かったのです。途中、数十人の私服も含めた秘密警察がドタドタと入ってきて全部下ろされました。そこに準備してあったバスに乗せられ、マズドクというチェチェンの上の北オセチヤにある、ロシア連邦軍の最高司令部のある場所に護送されてしまいました。そこに入ると、チェチェンはすぐそこなのに陸戦地でだれも通れない。そうやって我々を中に入れるのを阻止したのですが、幸いモスクワの連絡事務所には連日海外やロシア中の報道陣から我々の動向について問い合わせがありまして、いろいろな妨害が逐一報道されていましたので、そういう背景から断固この護送を抗議しまして、ナズランに行くことを要求しました。

内務省は最終的にはその要求を受け入れてナズランに入ることができました。そこから徒歩でチェチェンに平和行進をしました。その為にロシア各地からお母さんがたがバスや汽車でナズランに集結することになっていたのですが、乗換えの駅で秘密警察で足留めを食われ、そのまま追い返されました。

ナズランに着いたとき、最後の極めつけの政府の妨害が始まりました。モスクワの国営放送の七時のニュースのトップで、「平和行進がチェチェンに入るとチェチェンの武装勢力が攻撃

する危険性がある」と三日間流したのです。デマ放送するわけです。それに対抗してチエチェンのドゥダエフ大統領は、情報省の声明でローカル放送で、「この平和行進がチエチェンに入ったときにはロシア軍の攻撃を受けない限り、我々は一方的に戦争を停止する。そして平和行進を歓迎する」と発表し、チエチェンから平和行進に連絡に来た婦人たちが涙ながらに訴えて、「あなた方がモスクワを出発したときから、チエチェン中の人がこの平和行進が最後の平和解決の望みの綱だと思っている。一日千秋の思いで神様が到来するような気持ちで待っている」。「我々チエチェン人だけでなく、最前線で犠牲を強いられている若いロシア兵もお母さん方がチエチェンに来てこの戦争をやめさせてくれることを待っている」と言ってくれました。それで我々はどんなことがあってもチエチェンに入ることを誓いました。

モスクワ出発の翌日、親書を送って「あなた方の平和行進を期待します」と言ってくださった連邦軍総司令官のクリコフからまた手紙がきました。驚いたことに、それは「あなた方の行進をチエチェンに入れさせない」と言う禁止命令でした。「あなた方の安全は保障できません」。我々は記者会見をして「断固命令を無視して行進をする。我々の平和行進が入ったときには戦争をやめろ」と言い続けました。

## 村じゅうの人も行進に加わって

安全が保障されないとわかったのに、地元のイングーシ、チエチェンの母親たち、何年も前から息子を捜しに来ていたロシアの母親たち、みんな集まって千人ほどで行進を始めましたが、



歩き始めるとすぐに見る見るうちに町中の人々が歩き始めて何千人もの大行進になりました。

チエチエンの国境の最初のチェックポイントに着くとそこでは断られたので、裏道を通ることにして、初めての村に入りました。その村人は朝から何キロにも並んで行進が来るのを待っていました。入ったのは午後になっていましたがその間ずっと待っていて、行進が村に入ると、沿道のお母さんは目から涙を流して泣きながら行進に参加し、村中の人全員行進しました。本当にここまでして行進を待っていた。それほど恐怖と苦しみの中で耐えてきたかとひしひしと感じました。

翌日さらに行進が続けますと、途中でロシアの検問所があり、そこでも止められました。粘り強く非暴力で交渉を続けました。その検問所は国防省の管轄で、とても素朴で、自分たちの母親ですから、人間的にもきちんと話を聞いて、母親たちがチョコレートや缶詰を持って行くと喜んで受けとる、そういった兵士たちでした。指揮官も最後は折れまして、次の村、サ



村中の回教徒も死を覚悟で（ロシアの母）と共に行進

マシキはチェチェンの兵士がたくさんいる危険なところだと言われましたが、私たちは、「身の危険は自ら責任をとる、どういう事態が起きても非暴力に徹してグロズヌイまで歩き通す」という宣言を書きまして、検問所を通させてもらいました。

三番目の村の数キロ手前にさらに検問所がありました。それは国防省管轄ではなく内務省管轄の特別精鋭部隊、オンモーンと呼ばれる悪名高い専門殺人集団の管轄でした。その検問所のすぐ向こうには村の人が何百人も迎えに待っているのです。私たちと村人との間にオンモーンの兵士が入って完全に封鎖してしまいます。「絶対にこれ以上は通さない、交渉の余地はない」と、あつという間に私たちの回りを戦車と装甲車と兵士たちが包囲してしまいました。

そのままの膠着状態で六時間が経ちました。その間にもすぐ横の戦車から村にどんな砲撃がなされ、戦争の真ただ中に何の装備もないお母さん方が六時間も立ち往生させられ、深夜さらに大量の兵士が動員され、お坊さんをゴボウ抜きにトラックに積み込んで連行しました。お母さん方も全部実力行使でトラックやバスに積み込まれ、行進は中止させられました。

アメリカのアクシオンビデオを見ているような恐ろしい場面でした。一時は強行突破する選択もないわけではなかったのですが、私は全責任者として、もし一人でもお母さん、あるいは村人の命に危険があるような選択は避けたいと考えました。このまま静かに中断しても、その姿そのものがロシアがどのような戦争をしているか世界に示すいい機会だと思って、そのまま無抵抗で中断しました。

長い説明になりましたが、密着取材をしてくださったドイツの放送局のドキュメントがありますので、この辺でそれを見ていただきたいと思います。

## 分離させられた母親と僧侶たち

(ビデオを上映しながら) これは同行したドイツのテレビ局がロシア用に作ったものです。私たちの日記やチェチェンの人の証言やフィルムなどは、連行された基地の中で全部取り上げられてしまいました。お母さんとお坊さんは分けられて、お坊さんは特別基地がありましてそこに連行されました。一時間半でこぼこ道を走ったのですが、その間頭を上げることはいけません。戦闘の真つ最中でしたから、いつ砲撃を受けるかわからないという事態でした。

お母さん方はトラックに乗せられて軍のどこかに連れていかれるところだったのですが、運転するチェチェンの運転手が機転を利かせまして、エンジンが壊れたと芝居を打ったのです。その間にお母さん方はどっとバスを降りて道路に座り込んで、お坊さんと一緒にさせると要求しました。というのは私たちが連行された基地はチェチェンの兵士が虐殺・拷問を受ける「死のキャンプ」と恐れられているキャンプでしたので、そこに入れられてしまったのではないかと心配して、合流させると要求を突き付けたのです。その間、チェチェンの運転手は、とても機転が利いていて、エンジンを直すために電話をするといって電話をしたのが、イングーシの大統領政府の事務所です。「こういう事態で、全員軍人に逮捕されてしまった」と通報してくれました。そこでイングーシの大統領は大統領令でイングーシの警察を送って、ロシア軍からお母さんたちの身柄を引き取ってしまった。そして無事お母さんはナズランに戻ることができました。

そこですぐ報道発表しまして、お坊さん方が行方不明になっていることを伝え、日本大使館にもすぐ連絡してくれました。そういうことがあったせいか、翌日ヘリコプターでお母さんのところに連れて行くと言われたのですが、連れて行かれたのはマズドクという軍事基地で、そこには大きなプロペラ機が待っていて、それに乗せられ、モスクワに送還されてしまいました。完全に平和行進と切り離されてしまいました。

基地の中も初めてまざまざと見ましたが、膨大な基地で、いま騒いでいるオウムの持っているのと同じ、あるいはもっと大きいヘリコプターが何台も飛んだり、朝から実弾射撃の訓練がバリバリと続き、戦車は走り回り、大きな高射砲が朝も夜も大きな音で、実戦さながらの状況でした。個人的にはロシア兵は、自分の考えている戦争観について、一晩中お坊さんと話し込んでいましたし、トラックで引き連れていった兵隊が差し入れを持ってきてくれたり、個人としてはとても気にしているのが良くわかりました。

## サマシキの大虐殺

こうして私たちはモスクワに送られましたが、再びチェチェンに戻ります。そしてナズランに戻ったちょうどその日に、サマシキという村で大虐殺が起こりました。これは一週間後の写真ですが、ごらんのように首も心臓も内臓もえぐられています。この写真の死体が一つ残っていましたが、この時点ではもう虐殺死体は証拠湮滅で隠されてしまいました。

女子どもも皆、火炎放射器で家に閉じ込められたまま焼き殺されてしまった。地下一階に隠

れ潜んでいた女、子ども、老人、身障者、皆、焼き殺されたり、手榴弾を投げ込まれたり、一軒一軒すべてやられた。虐殺を起こす前にまず金目のものはすべて略奪していきます。それが三日間続き、だれも逃げるのができませんでした。十五歳から六十歳までの男の人はその場で銃殺されたり、生きながら首や心臓をえぐられたりしました。

虐殺が起きたことを聞いてすぐサマシキにかけつけて事実を知りました。二週間前、村中が最後の平和の希望だと言って平和行進を迎え入れ、チェチェンの兵隊もいたのですが、だれ一人攻撃する人はいなかった。皆泣きながら平和行進をした。その村で虐殺が起きたのです。

ロシア政府の報道は全くの嘘っぱちです。「チェチェンのゲリラが村を出て行って、百六十丁の機関銃をロシア軍に提出したらこの村は攻撃しない」と通告があつて、必死になつてそれを揃えようとしている最中に村が包囲されました。そして虐殺が始まりました。三日間続いたわけです。六、七、八日と。私たちは八日にナズランに戻つて、命からがら逃げ出した人から「サマシキの村は全滅してしまつた」と聞いてすぐかけつけましたが、私たちを歓迎してくれて一晩泊まつた隣村の村はずれは、もう黒山の人だかりでした。そこへ検問所から歩いて逃げてくる人たち、それは女か子どもか老人だけです。若い男性はだれも逃げてこられない。そこからバスやトラックで村はずれまで運ばれてくるわけです。村中の人が集まつて何が起こつたかと驚く。逃げてきた人たちは悪夢のような話を伝えました。

私たちがかけつけたとき、検問所はだれも中へ入れませんでした。逃げてくる人の話を聞くと、いま言ったように、女子どもは家で焼き殺されたり、地下室へ逃げている人は手榴弾で爆死したり、男の人は銃殺されたり、死のキャンプに送られたり、途中でも兵隊の気分次第で銃

殺されたり、あるいは特別訓練した犬を解き放してかみ殺させたり、装甲車が捕虜を裸にして後ろから走る。逃げられない者は下敷きになって殺される。男の子でさえ、お母さんの目の前で戦車に下敷きにされて殺される。お母さんも自分で火をつけると言われる。つけられないとロシア兵が火炎放射器で焼き尽くして何一つ残らないようにする。

駅や学校でも少年たちが首を吊られて、死体が何体もバラバラになっていました。

私は外国人として初めてサマシキの虐殺の報を聞き、とても驚いて、すぐ世界に伝える責任を感じました。もちろんチェチェンは電話もないのでモスクワに連絡は取れなかったのですが、幸い人権委員会のグループがその村におりまして、携帯用の通信衛星の電話を持っていて、それがこの虐殺を伝える唯一の命のパイプになりました。それでモスクワのコーディネーションセンターに電話し、第一報を伝えました。今ロシアでやっている虐殺は、結局世界の国際世論がチェチェン戦争の無謀を黙認した結果であると。そして政府の発表はすべて嘘で塗り固められていて、チェチェンの人に加えている虐殺は、三週間後の五月九日に対ナチスドイツ戦勝記念式典を準備しているクレムリンそのものが、ナチスと何ら変わらないことをしている。民族皆殺しの虐殺だ。その式典に世界中の首脳が集まって来る。そうしたらこの民族皆殺しの戦争を認めてしまうことになるから、「来るな」というアピールを、その場で衛星電話で送りました。それがモスクワの事務所からマスメディアに発表されますと、すぐに反応がありまして、国会議員の議長が調査の名目で一週間後にサマシキに来ます。そのときはまだジャーナリストも赤十字の人も町はずれに待機していて村には入れない。その間にずっと死体を焼いたり埋めたりしているわけです。

一週間後に国会議員の議長が来るのですが、彼は実はエリツインの傀儡で、グロズヌイの空爆の時も調査に入りまして、でたらの嘘の発表をした人です。チェチェンの人はそれを恐れて、議長が出てきた時に「どれほどのことをはつきり見たか、聞いたか」と詰め寄りました。議長は「全くそのとおりだ。こんなにひどい虐殺は今すぐ世界に発表しなければいけない」と言って帰ったのです。ところが帰ってテレビで発表した時には全くの嘘八百でした。「焼けた家が十軒ほどで、一般市民では婦人が数十名命を落とした。やむを得ない。戦争では起こり得ることだ」という形でテレビ発表しました。するとテレビのアナウンサーが、議長に我々が衛星電話でアピールした文を突き付けました。「サマシキからこういう報告がきていますが、どうなんですか」と。それは西側の人に向けて「対ナチス戦勝記念などするな。ロシアのやっていることはファシズムだ」と抗議した文書で、どういう虐殺があったかも、逃げてきた人から聞いたままにつぶさに描写してあります。

すると議長は「こんな文書はドウダエフの回し者が作ったプロバガンダの文書だ。日本山妙法寺の坊さんたちやへ母親の行進」の母親はロシアの安定を揺るがす行為をする人で、国家犯罪者である」と名指しで話しました。そのくらい真実をねじ曲げて顧みない、そういう破廉恥な政府の態度でした。あらゆる報道を総動員してサマシキの虐殺を湮滅しようとした。そして五月九日の戦勝記念日のお祭り気分を盛り上げようとしていたのです。そんな中にクリントン大統領やメージャー首相やミッテラン大統領が参加したわけです。

その虐殺後も引き続きチェチェンの中では山間部と平野の境にある村が攻撃の焦点になり、激戦が続いています。一晩中、ロシア軍の兵器を使いつくすのではないかというような激しい

空爆と攻撃が何週間も続いています。住民が全部逃げたバームートという村があります。そこは山と平野をつなぐ重要なルートなんですね。そこを押さえようとして攻撃が続くのですが、今日までその村を押さえることができません。

村人の話によると、数百人のロシア兵の死体が散乱しているそうです。そういった村を私たちは五日間にわたって歩きました。夜は野宿しましたが、山の向こうでは一晩じゅう激しい戦争が続いていました。そこから帰って、チェチェン戦争の本質は何か、これ程だれもない村になぜミサイルを打ち込まなければならないのかを訴え続けています。全部の村がそうなのです。偵察機が来て山の中で少しでも動くものが見つかるとう十分以内にヘリコプターがやってきて、一帯を爆撃します。我々も飛行機の音が聞こえるとじっと身を潜めていなければならぬ。見つかるとう一巻の終わりですからね。

結局、このチェチェン戦争の一面は武器消耗戦だということです。戦果があってもなくても構わない。人がいてもいなくても構わない。ありとあらゆる武器を使いさえすればいい。例えば一晩に五百発ミサイルを打ち込んだとします。テレビの報道では「この村には住民が残っていて、攻撃はできない」と発表するのです。実際は住民はだれもない。そこに武器をどんどん使って、千発打ち込んだ時には「今晚の戦闘には二千本のミサイルを使った」と報告します。残った千本は世界の闇の武器マーケットに流れて、指揮官のポケットマネーになるわけです。

一方、ロシアの経済崩壊の中で最も打撃を受けたのは軍需産業で、全産業の七〇パーセントだと言われています。そこにどんどん発注が来るわけです。そういう構図がチェチェン戦争の本質にあるわけです。これはソ連時代から、ソ連崩壊の元凶となった社会構造ですが、それが





この四年間、改革といいながら、この構造的状況には全くメスが入らなかった。そういった経済崩壊の中で、チェチェン戦争によって軍部と軍需産業が、それに結託するマフィアが、クレムリンの権力中枢の中心勢力になったということです。それがチェチェン戦争です。

もはやそれをチェックする勢力も機能も、今のロシアに存在しません。そこに今のロシアの直面する本当のカオスの危機の深さが存在すると思います。

けれども、ロシア兵士の母親たちや、真実を伝えようと、わずかながら健闘するジャーナリズムの中には、それに対抗する一縷の希望があります。しかし、今ロシアが直面するチェチェン戦争を通して眺めたロシアの混沌の深さ、それはそのまま即、世界の近未来においてどれほど大きい危険の要因たり得るか、世界はもつと正しい認識を持つべきだと思います。その認識がない場合、大きいつけを世界が払わなければならない。そういうふうに強く感じました。

例えば、一日にこの戦争で六百万ドル使われる。この五か月の間に六ビリオンとも七ビリオンともいわれるお金が使われています。六ビリオンダラー（六十億ドル）は、ロシアの経済改革のために今年IMFが貸与するはずの全金額です。それが全く前倒しのかたちでチェチェン戦争に使われている。それがロシアの現状です。

このまま、無定見に西側が経済改革民主化というスローガンの下に今のロシア政権を助けていくと、その跳ね返りは大きいものがあります。かといってどういう解決があるのか、私にもわかりませんが、大変危険な事態に直面していることを認識しておく必要があると思います。

# 「家事を夫に任せよう」

坂井 幸

(中国新聞文化部)

先日、「専業主夫」に会った。連載企画「男と女」シリーズの取材のこと。行政は男女共同参画型社会の実現を唱え、女性を経済的理由があるにせよ、いろいろな職場に進出している昨今、家事の手伝いをする男性は確かに増えてきた。しかし、現実に残業で遅くなるからとか、洗濯を干すのは近所の手前みつともないとか、男はあれこれ理由をつけて家事を敬遠したがる。地方都市では、世間の目も気になるところ。だから専業主夫だと公言する男性を訪ねる時も、「趣味程度で家事をやっているのでは」と、さほど期待はしていなかった。

「ええ、僕の職業は主夫です」という四十四歳のその男性は、五年前にサラリーマン生活に終止符を打った転身派。不登校気味の子どものために、夫と妻のどちらかが家に入ろうと話し合った結果の決断だった。早朝から子どもの弁当を作り、掃除洗濯を済ませ、妻を職場へ送迎、そして空いた時間で子ども会の世話役を……と、今では見事に主夫役をこなしていた。「僕はいわゆるヒモではありません。自分なりに主夫という職業を一生懸命に勤めているんです」と彼。傍らで「そう、そう」とうなずく彼の妻。「奥さま」ならぬ「外さま」である。

私は、むしろ彼女のほうに興味をそそられた。主婦の座を捨てた女。彼女いわく「料理の味付けが多少変だろうが、掃除が行き届いていなかろうがちつとも気にしません。そりや彼は、そうした教育を受けていないんだもの。彼に完べきな主婦業を求めるのは無理よ。私が好きな仕事を続けるためにも、彼のやり方を尊重してあげたい」

妻から家事一切を任せられた夫は、喜々として新しい料理にチャレンジし、マイペースで自分の時間を楽しんでいた。どうやら彼女の家事への寛容さが、「専業主夫」を誕生させたらしい。私はいえ、休日に多少なりとも家事をする夫に「私のやり方と違うんじゃないの」といちゃいちゃに触っており、「夫にうまく協力してもらうには、妻の心構え次第ということか。ふむふむ」と妙に

納得して取材を終えた。女性は家事をしなければならない——という固定観念に、どうやら私自身  
が縛られていたらしい。

「仕事に男も女もない」と意気込んでいた新米のころ、「女性の視点で記事を」と言われて妙に戸  
惑つたり、必ず回ってくる料理やファッション関係の取材を「あまり興味ないんだけどなあ」と思  
いつつ記事を書いていた。ところが、警察回りや役所回りで男社会の仕組みを知らされ、「女性記  
者」という周りからの視線を受けて、否応なく「女であること」を意識させられてきた。それがい  
つの間にか日々の生活でも、「女はかくあるべし」と自分を拘束していたのかもしれない。

取材で出会う多くの働く女性も、確かに忙しい毎日を送っている。出社前に慌ただしく家事を済  
ませ、帰宅すると着替える間もなく食事作り。「夫は手伝わないのですか」とたずねると、「夫に頼  
むと時間がかかったり、無駄が多くてイライラしてしまう。だから家事一切を引き受けてしまふ」  
という。そして、ますます女性を忙しくしてしまう。家事の領域に男が入るのを拒んできたのは、  
こうした女性側に役割分担意識が根強いことも、事実であろう。

そこで女性のみなさん、もつと家事を男に任せてみませんか。少々じれったくても、我慢して見  
守る気持ちが大切なことを、私は先の「外さま」から習った。男性主流の新聞社内さえ、時間が  
あれば家事育児を引き受ける若い男性記者がかなり存在している。その中には「以前は分別ごみの  
出し方が分からず、燃えるごみも燃えないごみも混ぜて出していた」という男性記者もおり、彼に  
してみれば、格段の進歩である。そこから生活密着型の記事も生まれるはずである。

というわけで我が家では、かなり夫流家事の範囲が広がっている。おかげで私は、毎朝一杯のコ  
ーヒートを飲む余裕ができた。

女性の担う「炊事」や「育児」は待ったなしで毎日ふりかかってくる面倒なのに対し、男性の受け持つ「ファミリーカーのオイル交換」や「家庭用品の修理」は、暇ができるまで放っておける、「いつやればよいか、自分で時間をコントロールしやすい」役割ということになる。二人とも家庭の雑事で忙しいかもしれないが、男性は「その電話、ちょっと待ってもらって」と秘書に命じる“重役”仕事、女性は「かかってきた電話を待ったなしで受ける」「秘書”仕事”。家の中でのストレスは女性のほうが大きいと報告する。

しかも、現代アメリカ共働き事情は、仕事と家庭生活の加速化を進め、その最大の犠牲者は「母親」だという。「さあ、急いで。出かける時間よ」「コーンフレークを早く食べてしまいなさい」「もう出かけるよ」と、皮肉なことに家庭生活の「作業能率監督官」になるばかりか、家庭のもめごとの矢面に立つのもいつも母親で「悪者」にされてもいる、と。

長時間拘束・睡眠不足・引き裂かれた感情・年1か月の超過勤務（余暇ギャップ）に対し、女性が支払わされている「悲痛きわまりない代償」と嘆じつつ、こうした「社会革命の立ち往生」によって引き起こされた緊張は、多くの男女に共働きを避けさせ、その結果、①伝統的な結婚（男が月給を運び、女が家事）にしがみつくな、②結婚そのものに抵抗している、とも。

妻が直面している葛藤。その悩みに思いやり深く耳を傾けながらやんわり分担を拒絶、家のことにほとんど手を貸さない夫たち。妻たちはそういう夫に反感を抱き、夫たちはその反感に対し身構えねばならない。そういう現状を、著者は「社会革命の立ち往生」による結果とみなす。

男女の性別役割分担のステレオタイプをどう克服していくのかという革命が、社会全体として進展せず、立ち往生のままならば、その状況を、個々のカップルはどう対処し、調整し、乗り越えようとしているのか。それとも乗り越え難い状況は、本当のところどういう風なのか。個人的にも大いに興味をそえられる。

スーザン・ファルーデーの「バック・ラッシュ」を読んでも、男たちが、①へと女たちを囲い込みたいのはミエミエだ。しかし、女たち自身、そんな葛藤にさらされるよりは、と安易な道を選んだとしても無理のない話である。「こんなに働かされるばかりはイヤだ。もっと人間らしく子育てや介護にも参加したい」と気楽に男たちが言い、女も「家庭のこまごまは嫌い。バリバリ仕事をしてみたい」と肩に力を入れず自然体で言えるようになりたいものだ。②の行く先が、どういう方向へ向かうのか。日本でもすでに定着しているシングル化のゆくえを見守りたい。

## セカンド・シフト (Second Shift)

奥川 睦

かつてアリス・ウオーカーは、フェミニズムが白人エリート女性のものに過ぎないという自分の抱く実感から出発し、もつと底辺を支えてきた伝承・技術があるとの思いから、大地にどつしり根を下ろした黒人のグランド・マザー (Grand Mother) たちの力強さを焦点に、ウーマニズム (Womanism) という言葉を提唱した。私が感激した程には力を持たず、Feminismにとって代わる気配は今のところなさそうである。

表題の語も、今後どう浸透し、力を持ち得るのかは未知数だが、興味をそそられる。アーリー・ホックシールド著「セカンド・シフト」を、訳者の田中和子氏は「第二の勤務」とほぼ直訳をあてている。オフィスや工場で働く「第一の勤務」(First Shift) に対し、家庭へ帰ってからの家事・育児等雑事すべてを含めて「第二の勤務 (Second Shift)」と呼んでいる。イワン・イリイチの命名したシャドー・ワーク (Shadow Work) とほぼ同義と見ていいかもしれない。

アレキサンダー・サザリーが、1965年から66年にかけて全米44都市から無作為抽出した1,243人の共働き親を対象にした統計によると、働く女性が1日に費やす時間は家事に3時間、子供の世話に50分に対し、男性はそれぞれ17分、12分で、逆にテレビを見る時間や睡眠時間は女性より、各1時間、30分長い。

これらの統計からも女性にとって「二重負担 (double bind) の日々」は明らかで、職場で男女の「賃金ギャップ」があるように、家庭での「余暇ギャップ」が、年間約1か月あることを立証する。

セカンド・シフトをめぐる妻と夫の意識のギャップを詳細に論じ切って、しかもかゆい所に手の届くような優しさのにじむ彼女の論調には、学者のデスクワークっぽい冷たさがみじんもない。著者自身の実体験からくる実感に裏打ちされた、深い思考がある。彼女は、男性に比べ女性のほうが

★仕事と家庭生活を両立させる問題に、深い関心を持っている。

★家庭や子供により強い責任を感じている (夫が喜んで家事を分担する場合でも)。

★どのくらい良い親なのだろうと常に考える (考えない女性も、なぜ考えないのか? と思索している)。

★野心に生きるかそれともそれとは無縁に生きるか、両者の間を行ったり来たり 心がいつも揺れている。

以上4点は、男性なら仕事ができればほとんど免罪されるのに、女性だと、仕事ができるからといって決して逃れることができない重いカセが心から離れないことを物語っていると指摘する。Double Standard・Double Bindは、正にSecond Shiftに直結している感じだ。

毎週木曜日、午後6時から新宿の〈あごら〉で「やさしい中国語教室」を開いています。これは、教室のようすを紙上再録したもの。こんな楽しい雰囲気です。どうぞいらしてください。また、ご希望の方にはテープをお送りします。1本1200円です。第1回の「四声」は、ぜひテープで聴いてください。

そのほかにも、いろいろ間違えやすい言葉があります。「手紙」は「ちり紙」、「汽車」は「自動車」、「検討」は「反省する」、「走」は「歩く」、「告訴」は「知らせる、言う」、「怪我」は、「わたしが悪い」です。「あなたが悪い」という場合は、「怪你」と、我の代わりに汝を意味する你を使います。

◆おもしろいですねえ。では汽車は何というのですか。

◇火車（ホウ ツオ）です。

◆手紙は？

◇信（シン）です。日本でも受信とか発信とか信書とか言いますね。

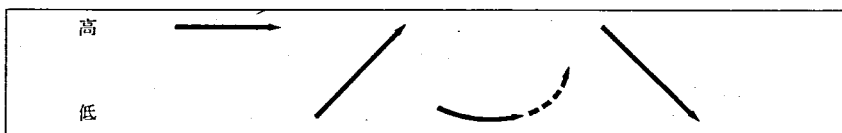
◆娘がおふくろだとすると、自分の娘、女の子のことは何と言うのでしょうか。

◇女儿（ニユイ アル）です。「私には娘が2人います」は、「我有兩個女儿」（ウオ イオウ リャン ゴ ニユイ アル）と言います。人によっては娘のことを姑娘（クーニャン）ともいいます。

◆中国語の発音を聞いていると、まるで歌みたいですね。

◇そうです。中国語でいちばん大切なのはメロディーなのです。四声と言って、四つの発声があります。ちょっと聞いてください。イーイーイーイー、

発音は全部イーですが、文字は医、疑、以、意で、それぞれ意味が違います。それぞれの発音の調子は、次のような「声調符号」で表わします。



第1声（—） 高く平らかな調子。時報のボーン之音。

第2声（／） しり上がりの調子。低いところから急上昇。エエツの調子。

第3声（V） 「あーあ」とため息をつく時の調子。低く抑えてゆつくりと尻上がりに。

第4声（＼） カラスのカアーのように、高いところから急降下。

そのほかに轻声もあります。シイエ シエ（謝謝）のように、あとの謝は軽く短く発音します。これには声調符号をつけません。でも、声調符号を気にしすぎると話せなくなりますから、まあ、どんどん気軽に話してください。

◆マーマーマーマ。イーイーイーイー。1回で覚えるのは難しいけど、毎日練習することになります。では謝謝（シイエ シエ）！ 再見（ズアイジイエ）！

# 袁先生のドロナワ中国語

## ①

◆ニーハオ袁先生。ようこそ〈あごら〉においでくださいました。北京会議をひかえて、みんなで大喜びしています。ところで「ドロナワ」ですが、北京会議までに大急ぎで簡単なあいさつだけでも覚えたいのですが――。

◇そうですね……。中国語の文章の構造は日本語とは全く別系統ですが、あいさつなど片言だけでも言えると親しさがずっと違いますね。

◆それに、何と言っても中国と日本は、同文同種の国。同じ漢字を使う国ですものね。筆談だってできるでしょう。

◇あ、それはあまり簡単に考えないでください。中国では漢字を大改革しましたので、日本の漢字とは違う字がたくさんあります。また同じ漢字を使っても、意味が全く違うものがあります。たとえば丈夫。これは「夫」という意味です。

◆えっ、丈夫が夫……。病人の夫でも「丈夫」というのですか。

◇そうです。丈夫、「ズアウ フ」と発音します。体が丈夫という意味ではないのです。

◆では妻は？

◇老婆。「ラウ ポ」と発音します。

◆新婚でも老婆ですか？

◇そうです。年に関係なく……。同じように夫のことを老公（ラウ ゴン）と言う地方もあります。

◆愛人、アイ レンという言い方もあると聞きましたが。

◇愛人は配偶者のことです。昔の中国では愛人は日本の愛人と同じ意味でしたが、解放後は配偶者のことになりました。夫は妻のことをアイレンと言い、妻も夫のことをアイレンと言います。

◆へえー、男女同権なんですね。

◇そうですね。一般に中国のほうが日本よりも男女同権はすすんでいると思いますよ。ところで、もう一つ間違いやすいのが娘（ニャン）。これは、「おふくろ」のことです。

◆エッ！ マーマ（媽々）というのではありませんか。

◇都会ではマーマという場合が多いのですが、いなかでは、まだニャンです。

◆クーニャン（姑娘）というのは若い娘さんのことではありませんか。

◇そうですが、相手に呼びかける場合は忘れずに小姐（シィアウ ジィエ）と呼んでくださいよ。デパートや郵便局の営業員でもホテルの服務員でも。

# ペルーの女は立ち上がった 13

## 第五章 立ち上がった女たち (1)

キヤロル アンドレアス  
訳 サンデイ サカモト

一九七九年、クスコで開かれた第五回全国ペルー農民同盟大会に参加した女性らはほんの一握りだった。女性の問題が後回しにされたり、無視されることに腹を立てていた女性たちは、組合に女性事務局を置くべきだと要請した。組合が管理主義と分断主義に陥り、農民の絶望的な思いを認めることさえできなかったリーダー格の男たちの前で、女たちはもはや黙っていられなかった。この提案は受け入れられたが、女性事務局の指導者として選ばれたのは男性だった。三年間、さまざまな地区の先住民女性が、地方での危機を乗り越えるために、そして次回の大会で組合員として認めてもらうために、女性たちを組織している間でさえも、この事務局はずっと何の活動もしなかった。

地方女性権利統一戦線の誕生



この頃、プノ州に地方女性権利統一戦線というグループができた。この組織の主な活動は、農民の政治教育だった。統一戦線の指導者は、「女たちはただ台所から出るための理由を探しているだけだと男たちが言っていたことを思い出す」と言った。この指導者の夫は、彼女が集会に行くことを主張したため、彼女から離れて行つた。「女たちの問題や現実を知ることの重要性を知ったから、こういうことに関係したのに、夫は私を捨てた。夫は私を集会に絶対行かせなかった。私たちには二人の子どもがいるが、二人目は私が集会に行つたという理由で父親に認知されていない。けれど、だからといって恥ずかしい思いはしていない。むしろ私はそれを誇りに思っている。この経験で、私は同志に私自身を捧げる勇気を持つことができたからだ」

女性組織に自分自身を捧げることは、国全体を経済的束縛から解放することだと女たちは考えている。だが、それは夫たちを説得するには十分ではない。また他の女性は次のように言つた。「もし夫が集会に行かないように命令したら、ただ一言、あんたは間違っているつて言つてやるんだ。私たちが女は、男たちの気まぐれにつきあつてゐる暇はないつて教えてやらなきゃだめさ。なぜつて？ 私たちが社会主義の社会を見ることができなくても、子どもたちや孫たちには必ずそれを見せてやりたいから。だから私たちは闘わなくっちゃ！ 将来誰でも平等に参加できる、肉を食べたりミルクを飲んだりできる自由な社会、社会主義の社会で新しいタイプの家族を持つために。今みたいじゃなくて」（これは貧しい者が金持ちの生活の仕方を批判することなしにそのまま受け入れて憧れていることを示す。彼女たちは経済的に抑圧されているだけでなく精神的にも抑圧されていると言えるだろう）。<sup>69</sup>

## ペルー農民同盟に女性青年委員会が発足

一九八二年七月、リマで行なわれたペルー農民同盟（CCP）の第六回会議に、地方から百人以上の女性が参加した。この会議に私も参加して、そこでの女性たちの吹き出さんばかりの不満、強い動員力、勝利を目のあたりにした。

大会の最初の夜、プノ州のある女性が二百人以上の代表者を前に演説した。彼女は聴衆の中から立ち上がり、マイクをしっかりと握り、「家庭やコミュニティで女性たちが苦しんできた何世紀にもわたる虐待に終わりを告げよう！」と女性たちと呼びかけ、聴衆を感動させた。危機のときには女性たちを利用し、女性が組合のリーダーになるのを拒否した男性に間違いを正すように求めた。大会はその頃までスペイン語で行なわれていたにもかかわらず、彼女はケチュア語ですらすらと話した。彼女はメディアのカメラが彼女に焦点を合わせたときもためらったりすることはなかった。

プノ女性戦線の代表がカンペシーノ組合のメンバーに訴えかけたとき、そこで何が起こっているのかを私は理解し始めた。そして、彼女の言葉は、何年もの干ばつによつて乾ききつた原野に走った稲妻のように聞こえた。話し終えたとき、彼女は興奮してえんえんと拍手をしている人々の前に座った。カンペシーノの組合の男性が、女性を社会的にも政治的にも従順にさせておこうとしたのは間違っていたということが、おくればせながら初めて公に認められた。そして、予想されていたかった地方女性の勇気ある反抗により、女性の運動は最高潮に達した。

女性の抗議の高まりに応えて、女性青年委員会がペルー農民同盟執行委員会によつて創られた。

第六回委員会で、若い男性は、女性たちがスペイン語以外の言葉を話すため、まとまりがないことを問題にした。しかし、ようやくその問題は議論され、選挙が行なわれ、今まで女性たちがしてきたように、複数の言葉で行なうことになった。そして、青年と女性の問題が一つの委員会で取り扱われるのは不適當であるため、片方を無視することなく、これからのように集会を持つたらいかにについての話し合いが行なわれた。参加者の中には、二つの問題を一緒にして、女性としての怒りを希薄にするのが執行委員会の目的だと言う者もいた。しかし、すぐに二つの委員会をつくるのは難しかったため、女性たちはその場の状況を利用して、貧困や疎外の影響によって、先住民コミュニティの子どもたちを失ってしまうことなど主に心配していることを議会で印象づけようということで見解が一致した。

女性たちは、子どもに未来を約束できないという絶望感を表した。それは、町で子どもが死んだり、ぐれたり、買売春や麻薬に走ったりして、家計を支えていた子どもたちは奪われ、コミュニティを存続できるかどうかさえ危うくなっていたからである。そう思うと、女性たちは、以前もついていた非常に難しい状況の中で耐えるという元氣さえもなえてしまうのだ。貧困や絶望と闘うための方法として、若者が疎外から解放され、革命闘争に身を捧げることができるような文化の誇りを回復させようと、女性たちは呼びかけた。

## 女性委員会の独立

女性たちは若者たちが自らの歴史について学べるように、地方に学校を建てることを組合に呼び

かけるようにした。女性たちは、若者が地方に残って、自分たちの権利のために闘いたいと思うようになることを期待した。「私たち母親はいつか死ぬ、状況はとても厳しい。しかし、私たち女は子どもたちに何かを与えなくてはならない。子どもたちを激励し、自分たち自身に誇りを持つよう教育し、よりよい世界のために闘わなければならない。私たちは、もう十分に男たちの後ろを歩きつづけてきた。生活と切つても切り離せなかった賄賂や失敗を繰り返さない、偽りの約束を受け入れない組織をつくりあげなければならない」

以前、女性がケチュア語で話しているのを非難していた若者は、政治闘争のために、女性たちが自分たちの言葉を勇気を持つて使つた力強さと団結力に感動した。彼は、若者の問題についての議論を聞きに来た。初め、彼は女性自身の問題に熱心な女性参加者の多さにつかりした。しかし、若者の疎外の分析を聞いているうちに、それまで受け身だった彼は、明白な青年運動の路線をもつようになつた。彼は、女性たちが教えてくれたことに感謝し、若者たちが自分たちで委員会をつくらうとしていることを執行委員会に知らせようと言つた。こうして青年委員会が独立し、女性委員会ができた。

女性委員会の集會が続くにつれて、個人的生活でも、コミュニティでも、また、そして地方の政治闘争でも、マチスモ（男性優位主義）と闘うために女性が自分たちを組織することが必要だといふことが主要な課題になつてきた。「男たちは私たちを尊敬してくれないし、私たちが言っていることに注意を払わない。男たちは私たちに知性がないと思つていて、時には出産して数週間もたない女たちを叩いたりさえする。もうこれ以上、同じようなことをさせるわけにはいかないと、男たちに知らせる必要がある」

女たちは、土地を奪い戻す闘いに繰り返し使われ、その後、「台所に戻るように」と言われたと、男たちを非難した。それは女性たちから政治的権利を奪ったばかりでなく、日和見主義のリーダーをつくりだした。男たちは地方でコミユニティの金を使い込み、共同の設備をうまく使わなかったり、闘うために自分を鍛えるどころか、酒を飲んだりするので、農婦たちはこのような男性は民衆運動のリーダーになる資格がないと考えた。「私たちは奴隷になるのはもうたくさん！ 男と政府の奴隷になるのはね。私たちは男たちよりましだとか、男たちに反対とかいうことじゃないけれど、地方での革命運動のリーダーシップをとらなくてはならないの。男たちといろんなことについて話をしたいし、仕事を助けてもらいたいし、コミユニティでも責任を持つてもらいたい。私たちは読み書きはできないかもしれないけど、知性がないわけじゃない。話し方も、考え方も知っている。知性に欠けているわけじゃない！ 私たちに足りないのは組織だ」とある女性が語った。

地方で水をいつでも使えるようにしたり、医療施設を造ったりする代わりに、サッカースタジアムを造るというように、男たちのマチスモのせいで資金が間違つて使われてきた。土地闘争の際に男たちが女たちと交渉したり妥協したりすることが多かったのは、彼らの土地やコミユニティとのつながりが、女性のそれと同じくらい強くなかったからだと女性は感じてきた。女たちは、男たちの組合内部闘争は、一部にはマチスモの影響である個人の権力闘争によるものであると批判し、自分たちを組織して、組合につきもののセクト主義を克服し、統一を表明できると感じた。またコミユニティのレベルにおいて、非常な苦しみを受けながら、お互いに援助せざるをえなくなったのだと女たちは言った。今こそ共通の保育の伝統を復活し、男性先住民の間の地位獲得競争をつくりだしたすべての慣例に、反対する時だと女性たちは感じていた。

## 搾取や抑圧の中から生まれた強い連帯

農婦は、女性たちが描いた漫画や、子どもたちが作った小さなシルクスクリーンでできた印刷物を農民委員会に持つて行くこともあった。それらのパンフの中で、地方組織の説明、女性たちが集まった理由、そして何年間もの犠牲の末、彼女たちが感じたフラストレーションと怒りなどを描写した。国内外の両方で売れる簞、毛布、セーターなど手作りの物を生産するために、女性協会が立ちこちにできた。女性協会ができたことによつて、女性たちはより定期的に材料を得たり、お互いに技術を教え合うような有意義な機会を自分たちでつくることができた。

時によつては、宣教師や政府や個人機関が、女性たちにそのような協会をつくることを勧めたが、結果的には女性たちはそのような機関に搾取され、農婦の貧困を招くものとなった。また政府は食品を輸入している人々や大規模に輸出していた企業に助成金を出したが、家族やコミュニティのために生産している女たちは、売る市場のないまま取り残された。女性たちは何の援助も受けず、自分たちの家族に衣食を与えるだけではなく、自分たちを犠牲にして、よその家族の世話もしなければならなくなった。例えば、肥料を買つたり、畑を耕す人を雇うために、女たちは、自分たちの生活に必要な物まで売らねばならなかった。

農民組合は、土地改革のものでつくられた協同組合の直接の経済的問題を主に扱つたが、最初、組合の設立の動機となった問題そのものが見えなくなつていった。その問題とは、コミュニティに先住民族が住む権利、土地や生産過程や彼らの労働によつてできた製品を管理する権利のことであ

つた。これらの問題を憂慮した結果、女性委員会の討論の司会役を務めた女性の一人が、組合の技術生産秘書の候補者に選ばれた。

委員会の集会在延期されたとき、無意識に参加者たちはお互いに肩を組み、広範囲にわたる彼女たちの関心事や、初めて感じた一体感をスローガンにして叫んだ。<sup>(6)</sup> 一番はつきりしていたことは、女たちが、男たちの仲間割れや男たちによる虐待や辱めに我慢するつもりはない、という力強い思いであった。女性たちは、ペルー社会の急進的変革に献身するために、女性として自分たち自身の団結を維持することに専心した。

この集会を見学していたのは、スラム運動と家事労働運動のリーダーたちであった。彼女らは、地方の女性に対する支援と、全国的な女性の団結が必要であると表明した。ペルー農民同盟の女性事務局の要求は次のような言葉で定義されている。

「地方女性の大規模な運動を起こし、沈黙を破り、忘れ去られた人々のために何千回も事実を訴え、町のスラムの女性労働者や露店商や家事労働者や主婦と共同作業をするために、力強い全国運動を繰り広げて女性民衆戦線をつくりあげ、自分たちの闘争と抑圧され搾取された人々の闘争とを繋げ、自分自身の権利のために闘うこと」

### 男たちも感動させた女性のスピーチ

女性の集会の熱気は、大演技場の周りにグルーブことで座りこんでいた他の委員会の注目を十分に浴びた。しかし、女性委員会は大会の平常どおりの日程が完全に終わるまで、集まった代表をす

べて紹介する予定ではなかった。大会の五日目、代表は、一晚中演技場の内側の外野席に座り、話をしたが、朝の六時まで、女性委員会は報告をする番がこなかった。少なくとも代表者たちの半分はベンチで寝ているか、居眠りしないようにコーヒーかパンを探し回っていた。女性たちは、議案のコピーをつくり、最終的なチェックをしていた。その部屋の床で私は毛布にくるまり、少しばかり眠った。各々の委員会は議案を発表し、討論するのに三十分しか割り当てられていなかった。女性たちは与えられた時間を最大限に使おうと決めていた。私は時間どおり演技場に再入場するため起こされ、フアウファ地方出身でオブザーバーとして一緒に資格を得た人の隣の席について。

女性委員会が準備した動議を発表するために選ばれた人は、クスコ州のコミュニティの会長であった。彼女は組合大会に以前に参加したことのある数人の女性のうちの一人だ。彼女はマイクの前の、演技場の男たちが座っている真ん中の長いテーブルに向かって歩きだした。彼女は自信ありげで落ちついて見えた。女性の声が拡声器を通して聞こえると、代表参加者たちは驚いて、目を開け、姿勢を正した。動議はスペイン語で書かれていたが、それらが読まれた後、女性委員会の代表は、ケチュア語で女性の状況の深刻さと女性が苦しんできた虐待の長い歴史について熱心に訴えた。すぐに会場の人々は目を覚まし、立ち上がって、激しく手やドラムを叩き、ラツパを鳴らしたり叫んだりして支援した。動議が読み上げられた後で、各地域を代表していたさまざまな派遣団体の女性たちは手を挙げ、長い延長コードのついているマイクの使用を要求した。彼女たちは力をこめて一人ずつ、組合における女性のリーダーシップの重要性和長い間忘れられていた権利を守るために、全国の地方の女性を動員することが重要であると語った。それぞれのスピーチは熱烈な歓迎とスローガンの叫びによって支えられた。「マチスモ打倒!」「男性支配打倒!」「ペルー女性農民同盟万



歳！」

遅すぎるくらいだったが、男たちは勇気づけられて、女たちを支援する気になった。初めは十分と決まっていたが、女性の報告は一時間以上に及んだので、男性司会者は次に進めようとして言った。「私たちは女性に反対しているのではありません。あなたたちを支援します！ この大会は女と男との闘いではないのです」。しかし女性の介入を止めようとするたびに、「もつと！ もつと！」という叫びで司会者の声はかき消された。

最後に、女性は技術生産秘書の地位も含めて中央委員会の二つの席を獲得した。そして、組合は一九八三年の女性プログラムを発展させ、女性組合員を増やすために全国を通して地方女性の集会を開くことに重点をおいた。

## 男を変えた女たち

農民大会が終わって、男たちの中には女性を積極的に励ましつづける者もいた。だが、他の男たちは、自分たちの手に負えなくなるかもしれないという懸念を表明した。男たちの中には冗談を言いながら、自己防衛しようとした者もいた。一連の反応の中で、一番気持ちの良かった男たちは、技術を必要とした女性組織にアドバイザーとして奉仕してきた人たちであった。大会が終わった後、彼らは言った。「今、新しい世界に参加していると感じるし、以前よりもずっとコミュニティの女性を尊敬できるようになった」

大会の前に、私はワンカベリカにある女性組織のリーダーの家を訪ねた。驚いたことに、私が質

問をするたびに男性アドバイザーが答えた。彼は尖った口調で、「問題が起こったときに、女性たちが私たちを支援できるように、女性たちを教育し、組織する必要があるんです」と説明した。実際は、女性自身が男性の反対にもかかわらず、組織をつくり、後に男性にも援助者として参加してもらったのだが、その男性アドバイザーは、自分自身が女性組織の創立者であるかのように主張し、コミュニティの男性の指導力を存続させるのに矛盾がないようにその機能を勝手に説明していた（このコミュニティは男性より女性のほうがずっと多い）。しかし、ペルー農民同盟に女性がかかわり、男性支配からくる女性の不満を公的に訴え、また、女性がリーダーシップをとれるということとを主張してからは、それまで保護的だった男性の態度が変わり、もはやそのような態度を維持することができなくなつた。

ペルー農民同盟の第六回大会では、比較的少数だが、女性の断固とした強い態度が、組合内の女と男の関係を変える基本をつくつた（おそらく、国内でも）。農民は希望と闘争の新しい時期に入つた。集会中に私と親しくなつた八十四歳の男性は、この変革を力強く表現した。彼の書庫にスペインの革命家であつたドロレスイバルリの作品や十八世紀ペルー人の両親を持つたフランスのフェミニスト革命家、フローラトリスタンの作品があると言つた。彼は常に、いつ女性たちは立ち上がるのだらうと思つていたと言う。

農民大会で表現された女性の力強さは、ほとんど公にされなかつたし、大会の記録にも残らなかつた。しかし農婦たちは、これに驚いたり、怒つたりしはしなかつた。それよりもむしろ女性たちは自分たちの絆を強め、彼女たちの経験を草の根レベルの活動に転換することに関心があつた。大会に出席した女性の中には、集会での女性の闘いがこんなにも高まつたのは、初めての経験であつ

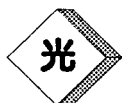
たと感じる者もいた。

農民大会が重要なのは、巨大な障害があつたにもかかわらず、女性が自分自身の運命を管理し始めたということだけにあるのではない。彼女たちが正しいと思つた方向へ農民同盟を回復させるという女性の断固たる決意の高まりがあつたからこそ、地方の貧しい者の代表として、自分たち自身にそれを力強く表現することができたのである。それはまた、資本主義の発展が都市に集中し、それに女性たちが完全に服従しなければならぬという恐れに対する反応でもあつた。ペルーの先住民女性性は、土地とコミュニティを守る正式なリーダーだ。しかし、女たちは経済的にもつとも搾取された位置にいるため、集団として買収されたり脅迫されたりしないだろうし、すべての人々のものであるはずの権力を自分たちだけのものとして維持するような、新しい支配者としての位置を築くこともできないだろう。だからこそ、このような女性たちが社会変革の勢力になりえるのだ。

ペルーの社会主義革命を推進するのに、農婦たちだけでも先住民だけでも十分ではないが、私たちが見る限り、闘争している者は彼らだけではなかつた。

ラテンアメリカの労働者階級地区に住む女性たちは常に闘っている。毎朝早くから夜遅くまで、家族のために生活必需品を得るために、必死で働かなくてはならない。中年の女性には、普通、五、六人の子どもがいる。このような女性性は、少なくとも自分たちの子どもがいつかこのような不安定な経済状態から抜け出し、自分たち家族の生活を多少なりとも楽にしてくれるだろうという望みを抱いて生きている。しかし、それはまた子どもにとつては大変な重荷にもなっている。

看護婦



と



(24)

## 萩原利津子さん(2)

増田れい子

昨夜、萩原さんは一睡もしていない。救命救急センターに張りついていた。公立富岡総合病院では、婦長さんにも月一度の割で当直がまわってくる。

萩原さんはいま外来検診センターの婦長さん(婦長歴はすでに十一年目)だが、昨夜は救命救急センターで夜を明かしたわけだ。

「ええ、いろいろとありました。六五歳ぐらいの男性患者が運ばれてきてまして、血圧の上が七〇ぐらいに下がっていました。少し手間どりましたね。感染症の疑いがあつたようです。もちろん即入院です。」

「勤務についたとたんは、九歳の男の子の交通事故でした。自転車に乗って道にとび出したところクルマが来て……。お父さんがついて見えて、おマエが急に飛び出したのがいけなかったのだよと、こんこんとさとしてました。自転車がその子の身替わりになつてめっちゃめっちゃにこわれたんですけど、ヘルメットをちゃんとかぶっていたので、大事に至らずに済みました。」

「そのあとは、虫垂炎の患者。どうにもおナカが痛いと言えられて、虫垂炎ですぐ手術しました。この方は急な腹痛で一度診察を受けに来られたんですけど、レントゲン撮ってもちよつと原因がわからなかったんですね。いったん帰宅してその一時間後に急激な痛みがきたんで、ご自分でおかしいと判断して救急に来られたんです。十一時半に入って十二時から手術でした。非常に急でした。今朝、外科の看護婦さんが見えて、もうお元氣ですよ。つて、ニユースを入れてくれました」

患者は他にもあった。八七歳の老女の骨折。散歩途中、ひよいとび出したイヌにおどろいて、よけようとしたとたん尻もちをついてしまった。骨粗鬆症が進んでいたため、たつたひとつの尻もちで右大腿部骨折をひきおこしてしまったのだ。入院。

とうもろこしを食べていたら、粒がハナの奥にひっかかってしまった。あわててハナをかんだのだが、出ない。異物感がひどいので診てほしいとかけこんできた男性。

「耳鼻科用のファイバーでのぞいたんですけど、どこにもとうもろこしはひっかかってないんですね。ひっかかってませんから大丈夫といつてあげましたら安心して、帰られました。おかげさまで氣がラクになりましたつて。氣分に異物がひっかかってしまうんですね。

このあたり自然が豊富なので、ムシが耳のなかに入ってしまったてとれないといったケースもちょくちょくありますね。耳に入ったムシをとるには、いったん耳に手でフタをして、明るい電氣の下などでパツと手をはずすと、ムシが光の方に逃げ出してくれるんですけど、どうしても出ない場合もあります。ファイバーをのぞいたら、ムシが羽根を広げたまんま入ってましてね。翌日、耳鼻科のドクターに出してもらいましたけど、若い男の方でした。こんなことでお世話になるの氣恥ずかしい……とボヤいておられましたね。ほんとに人間って生きてたらいろんな目に遭遇するものです」

こどもの事故がやはり多い。鉄棒からおちた。発熱した……とひっきりなしだ。

「昨夜、午前一時ごろでしたね。発熱したお子さんを連れてお母さんがかけこんで来ました。お子さんの熱が下がらないと、あたふたしているのです。きいてみたら昨日もちゃんと薬をのませ、坐薬も入れたんだけど下がらないと、切羽つまった表情です。薬が効かない何とかしてほしい……と。薬は即効性があるものと思いこんでおられるわけです。そうではなくて、薬が効くまでには一定の時間がかかるのですと説明しましたが、若いお母さんのなかには効くまで待てないタイプが増えています。夜半の一時にこどもを動かしたらまた熱が高くなってしまうのに。」

やすませる方がかんじんですよ、と話したらやつと安心されましたけどね。核家族の母親はこういふとき、相談するひとが近くにいないともうパニックを起こしてしまうのです」

核家族でこどもが少ない。一人かよくて二人。そうなると、親はこどものいいなりになつてしまうことが多い。甘やかしてしまう。その甘やかしがこどもの病気を悪い方へ持つていつてしまうこともしばしばだ。

萩原さんが小児科病棟にいたとき、苦労したのは、この点だった。

「消化不良で入院したお子さんがいました。普通の食事はまだ早い。おかゆからはじめましょうとおかゆを用意しましたら、食べさせないんです。『うちの子はおかゆ食べませんから』というんですね。おナカのすいた子にじやどうするかつていうと、お母さん、スナック菓子を一と袋与えてしまふ。おかゆと梅干しはアルカリ食品で、弱った胃腸にはとてもいいのですと、いくらその効用を説明しても、聞いて下さらない。嫌いなものは食べませんからの一点張りです。そうして回復が遅れてしまふのです。」

広告宣伝には大変のりやすく、あたらしい栄養食品が出たとかどこそのパートのレストランには高級離乳食のメニューがあるときいたりすると飛びつくのですけど、おかゆに梅干しといった日本の家庭での養生食には見向きもしない時代になりました。対応がむづかしいです。

それと、こどもさんに薬を飲ませるテクニクがない。錠剤はのみませんといつて拒否なさる。こどものイヤがることは、こんりんざいしない。必要なことでもない。

入院したこどものことでお母さんが一番神経質になる点は、病気をなおすことよりも、勉強のおくれです。そつちの心配でイライラなさる。病気になっても病気でいられないのが、いまのこどもたちなのかも知れません」

萩原さんは、幼いうちから競争社会に放りこまれたこどもたち、こどもを愛してるのか甘やかしているのかそれともいじめているのか、こつちやになつてイラつく母親たちをベッドサイドでハラハラしながら見ている。

アドヴァイスもナシのつぶて。アドヴァイスが逆に作用して、「看護婦がうるさい」「投書するゾ」とまでこじれることさえある。

「でも、私は、一時的には受け入れられない場合もあるでしょうが、病気をなおして健康にもどるために、必要なことは黙らずにいうことだと気をとります。あきらめてしまつてはいけません。でもそういう思いが患者さん、そして家族の方たちに伝わらないでしまうことが、一番かなしいことだし、一生懸命看護にとり組んでも、亡くなられてしまうことが最大のショックですけれど……」

看護婦の日常というのは、思いが伝わらない。伝えよう、伝えたい、という心の葛藤の連鎖のなかで過ぎてゆくということだろう。

萩原さんは、ベッドサイドでの白衣の生活をこうして続けてきて、いま看護に必要なのは看護のマニュアルにだけしぼられるのでなく、手づくりの創造性にあふれた看護なのだと、模索を続けている。

「わたし、スナック菓子のものがイヤなんです。このあたり土地のお菓子で、焼きみそまんじゅうつてのがあるんです。鉄火ミソの入った小麦粉のおまんじゅうなんですけどほのぼのとおいしい。それをこはん代わりに頬張りながらこういうおいしい味わいの、心がほのぼのしてくる看護というのをどうやって実現したらいいかって、考えるんです。たとえば、こういうことなのかしらつて……」

萩原さんは一例をあげた。

点滴を受ける患者は数多い。たまたま昼時に、点滴をはじめ患者がいた。萩原さんが見ていると、看護婦はその患者の右手首に点滴のチューブをつないだ。それでいいのかと萩原さんは別の考えを示した。

「患者が左利きの方だつたらいいですけど右利きの方だつたら、左手に点滴のチューブをつなぐようにしたらと私は思うんです。何故つて、お昼どきでしょう。お食事は右手でしますでしょ。点滴つけてたら食事ができません。自分の手で食べる食事と、介助されてする食事と、どちらが患者にとつて好ましいか。起きられないほどの重病なら別ですが、患者にとつてのぞましいのは、自分でする食事だと思います。それなら、点滴は左手に……と看護婦はとつさに機転を働かせないと……」

そういう気づきくばり、患者の心を満足させるケアをとつさに察知して対応するというひらめきと実行力が、考えて創造する手づくりの看護にあたっているのではないだろうか。



萩原さんは病棟で、そういう手づくり方式を実践してきた。

マニユアル通りでいい場合とマニユアルにプラスアルファする看護と……。

「バタバタ、マニユアル通りにやってしまえばそれは『ビジネス』で終わっちゃう。考えてやってはじめて『看護』になるのではないか……」

そうだろう。ただ、そういう看護を可能にするには、看護する側の心の内側がうるおっていないければならない……うるおいのある心からうるおいのある看護の花が咲くように思うと、萩原さんは自分の心のうちをのぞくような面持ちで語りついで。

「感性をゆたかにするっていうことなんです。美しいものを見て美しいと感じられる……何でもないことのように、結構これができない。疲れとか無力感とか多忙に責められているうちに、きれいな花を見てもきれいなと思わなくなったりするんですね。目は開いていてもスケジュールに追われてせかせかして、何にも見えなくなっている。

私は若いころ、絵の世界に入りたいと思ってました。美術の勉強のためには相応の親の資力も必要で、結局私は断念して、看護で自立をはかったんですけど、美しいもので癒されたいといつもねがつてます。いまは音楽で癒されます。音楽の世界に心を遊ばせて、そこで心を回復させて、看護にかえります。文学も学ばなければと思つてます。看護婦に必要なのは、看護の技術の習得だけでなく、人間世界を広く知るチャンスではないかと思つてます」

心電図を読めるミニドクター的な看護婦にはたいてい誰でもなれるが、手づくり看護のできる、考える看護のできる大看護婦への道はなかなか険しく一生かかりそうだと、萩原さんは、瞳をこらした。

(この項おわり)

# 女ひとりドケチ旅 6

辻 みゆき

フンザ

カシユガルからパキスタン国境の山間の村フンザまではバスで一泊。いよいよこれからしばらくはイスラームの世界だ。イスラームは初めてではないが前回はグループだったので今の気持ちとは全然違う。

女が一人では歩かない国。途中までは田中君たちが一緒だがその後は……。私は人にいろいろ話を聞いてしまったもので、聞かぬが仏だった日本での出発時よりはるかに不安になっていた。私は心底から、空手なり、柔道なり、合気道なり、小林寺拳法なり習っておけば良かったと思った。腕力に自信があればそんな話を聞いたぐらいでびくびくせず、もつとどーんとしていられる。

世に女一人でどのような危険地帯、どのような無法地帯、どのような奥地にでも入って行く人がいるが、彼女たちはどこから自信を得ているのだろう。護身術に長けているのだろうか。武器を持っているのだろうか。それとただ単にノーテンキなのだろうか。私の友人には三番目が多いが私はどちらかというと心配症だ。

中国―パキスタン国境のフンジュラー峠は標高八千。国境付近は寒くて雪が残っていた。空は高く、山も高い。岩を砕く溪流。

一方に「中国」、もう一方に「パキスタン」とある碑の前でベレー帽などがぶつて洪くきめている国境警備隊のおじさんと一緒に写真を撮ってもらう。

その後、峠のふもとの検問所まで峠道をひたすら走る。

「カラクルム・ハイウェイ」とは高い所を通っているから「ハイウェイ」という、と誰かが言っていたが、なるほどとうなずけた。一部をのぞいて舗装されておらず、ガードレールももちろん無い。落石、崖崩れなど数限りなく、いきなり直径一メートルはあるうかと思われる岩が道路の真ん中に転がっていたりする。まるで熊野の山中のようだ。崩れかけた道からバスがガクツと傾く度に乗客の面持ちも青ざめていた。

それにしてもバイクで来ていなくてよかった。もしもバイクだったら今頃乗るのをあきらめて、ふうふう言いながら押して歩いていたところだ。

国境検問所で、パキスタン・ビザは持っていないがともかくここまで来てみたかったという安田ちゃんと別れる。日本人は何年か前まで入国ビザが要らなかつたらしいが、日本側がパキスタンから働きにくる人の数を押さえようと入国ビザを義務づけたため、パキスタン側もお互いさというところで日本人にビザを義務づけたらしい。

中国から乗ってきたバスはその検問所まで。その辺りで客を待っていたジープで、田中君やたまそそこにいた人たちと山中の小さな村、フンザへと出発。途中人気のない山中でジープが急に止まって、別のジープが近づいてきたときは、その別のジープから追剥ぎ仲間が降りてきて今から身

ぐるみ剥がされるのではないかとひやりとしたが、幸い単なる運転手交替だった。いちいち心配すると疲れる。

フンザ……ここは山間の小さな村だが、我々のような中国からパキスタン、あるいはパキスタンから中国へ行く人が必ず通る拠点だし、また山を登りにくる人もここに泊まるらしい。いくつか宿がある。

私と田中君は一番安い「フンザ・イン・ホテル」という所へ泊まることにした。

ここは一般に「ホテル」と聞いてイメージするものとはちよつと違っていた。「山小屋」と言つた方がおそらく近いものを想像してもらえらると思う。コンクリート造りの平屋で六畳ぐらいの部屋が五つほど。部屋にはテーブルなど余計なものはなく、小さなベッドが四つほどずらりと並んでいる。ベッドにはまさに「せんべい布団」がじつとりと湿り気を含んで横たわっている。着いてすぐそこに泊まつていた人に「蚊がいて、僕も寝てる間にいっぱい噛まれちゃったんで寝袋で寝ないとだめだよ」と警告された。

しかし私もこの辺りまで来るとそれぐらいのことはどうつてことなくなつていた。そんなことよりこの支配人兼コック兼掃除人兼エトセトラのおじいさんがとても良きそうな人だった。独り者なのか、おばあさんを先に亡くして子供たちは町に、というのか知れないが、無口な、すでに人生を達観しているような翁だった。

翁のいれてくれたお茶が忘れられない。ミルクティーなのだが、イギリス式に、まず紅茶をいれて飲む前にミルクを注ぐのではなくて、ミルクを沸かしてそこに茶の葉と砂糖をいれ少し煮るそう。だ。すごく甘くて最高に美味しい。その後自分で作つてみても、あの翁の味には到底及ばない。

ここで初めて「水洗式」トイレに出会う。拭く時に紙を使わず水で洗い落とすのだ。見た感じは便座がなく日本と同じ感じだが、ただ便器の横に水を入れた壺なりジョーロなりが置いてある。トルコまではこの様式のトイレが一般的なようだったが、どこへ行つてもどこのトイレの壺にも、水が入っていた。どうやらエチケツトとして自分が使い終われば水を足しておくもののようなのだ。そのためたいてい便器のすぐ近くに水道の蛇口があつた。

紙の節約になるし、たくさん使つた紙が流れるまで怒濤のような水を流す西洋式水洗トイレのような水の無駄もないし、環境に優しいトイレだと思う。そうはいつても便を洗つた後ではその手をいくら洗つてもばい菌がついているような気がして、紙を使い慣れた者にはなかなか実行することができない。私は結局、一度紙で大まかなところを拭いてから水、というふうにはできなかった。自分の手を使つて洗つてもその手をしっかりと洗えば問題なしだろうが、確かに紙で拭いてさらにその手を石鹼で洗うというほうがばい菌の残り方は少ないだろう。しかしこの「水洗様式」が原因で病気が多いという話はなかつた。それより人間がいわゆる「清潔」になりすぎると、洗剤混じりの排水や多量の使いすてられた紙で水質汚濁、大気汚染につながるし、大量に需要される紙のせいで森林も乱伐され、人間にもすべての動植物にも不健康な環境となつていく。

人間の体だつて、茶碗だつて、そんなにびかびかに洗うことないのだ。三日か四日に一度さあつと流し、たまに湯に浸かつた後ふやけたところで垢落としをすればよい。そうすれば石鹼などなくても十分清潔に暮らしていける。茶碗だつて昔の人のしていたみたいに御飯を食べた後に茶を注ぎ、さらさらとこびりついていた御飯粒を洗い流し、後でまた次の食事の時そのまま使えばいい。

それにしてもトイレで紙を使う習慣がある民族は、それだけでも「手洗い」民族に比べて莫大な

ムダ使いをしているのだから、トイレットペーパーぐらい、再生紙を利用する、という法律を作つてはどうだろう。

ここフンザでは川に銀色の水が流れており、水道の蛇口から出てくる水も銀色だった。このあたりの岩石の色が銀色だから、細かい砂状になったものが混じっているのだろう。髪など洗うとじやりじやりした。しかしそのじやりじやりがかえつて油分を落とすのにいいのか、洗った後ではいっになくさらつとしていた。

この銀水で洗ったシャツなど今でも持っているが、すっかり銀色に染まってしまうていて三年近く経つ今でもまだ色はかわらじ、見るたび懐かしい。

しかしこの水は飲み水にはちよつと向かなかった。山をすこし登つて泉まで飲み水を汲みにいった。その水の美味しかったこと。「六甲の美味しい水」よりはるかに美味しかった。

夜、私は生まれて初めてこれほど多くの星を見た。空一面に所狭いばかりに散らばっているのだ。琵琶湖に近い実家ではまだ星が点々と見られるのだが、東京の下宿の窓からは空が見えなかった。あまりに隣の家とくつき過ぎているからだ。それでも無理をして窓際から上方を見上げると、一角の空がかるうじて見える。月を眺めながら寝入るのが好きで、夏などは窓を開けたまま窓際に布団を敷いて、隣の家との狭間にわずかに見える空を仰いだものだが、深夜になつても空が暗くならず屋はほとんど見えなかった。大氣中に塵が詰まっている上に煌煌とした街のライトがそれに反射して空がいつまでもぼんやり濃んでいるのだろう。ここは見事に真つ暗だ。真つ黒な空に星が光りを放っている。

生まれて初めて流れ星を見た。それも一夜に三つ。流れ星に願い事をすればかなうというのが本

当なら、ここフンザに一週間もないうちに私のすべての願いは叶ってしまうだろう。しかし、あつ流れ星だ、と夢中になつてゐる間に三度とも願い事はかけそびれてしまった。仕方がない。他力本願ではなくて自力本願を目指すことにしよう。

旅籠屋の翁が満天の星空の下、絨毯を敷いて静かに祈り始めた。神に祈つてゐるというより宇宙の無限の下にひれ伏してゐるよう。まもなくそのまま寝入つてしまつたようだった。

## キルギツド

私の密かな願いがあたかも星に伝わつたかのごとく、私はイラン行き道連れを得た。ちやうど同じような行程・日程でイランに行くという人が見つかったのだ。同じ旅籠に逗留していた丸さんで、小学校の先生をしているらしい。道連れが女性でも男性でもどちらでもよかったのだが丸さんは男性だった。より安全かもしれない。ひとまずラツキー。

田中君はイランまでは行かずバキスタン山中でゆつくりすると言うので、なんだか本当に幼なじみのような氣のしていた彼だったが、またどこかで会うことだろうと思いつつひとまずお別れした。朝早くにキルギツド行きの軽トラに乗り込むところまでわざわざ見送つてくれた。

その出発の朝、一緒に行くはずだった丸さんは寝坊をして結局私一人で先にキルギツドへ行くことになつた。山道を下りていく。空から遠くなつていく。あんな見事な星空を見た後ではそんな空から遠ざかるのがなんだか惜しい。

キルギツドは大きな街だ。人も車も多い。私はバスの運転手に丸さんと待ち合わせるはずのカフ

エの名を見せてその前で下ろしてもらった。

車を下りるとすぐいい匂いがした。見るとひょうきんそうな中年のおじさんが店先でホットケーキのようなものを焼いている。ここが丸さんの言っていた「マディナ・カフェ」だ。ほつとして店に入りウェイターのおにいちやんにミルクティーとそのホットケーキを注文する。

めずらしい客だからか、マスターらしきそのおじさんがやって来てそのホットケーキを指し、「でいす・いず・まい・スペシャルメニュー」と言った。パキスタン人のかなり多くが英語を話す。植民地時代の影響だろう。

「マルの知り合いでここで待ち合わせしてるんだけど」と言うと、

「おお、マル・いず・まい・ふれんどネ」と言つて顔をほころばせ、ホットケーキを一枚おこつてくれた。

丸さんは一か月ほど前、すでにこの辺りにいたのだが、その頃六月の末の一番暑い時期で耐え切れず、しばらく山へ逃げ込んでいたそうだ。それでこのマスターとはもう馴染みなのだ。このパキスタン式ホットケーキというのは、主に小麦粉とミルクをこねて、たつぷりのバターで薄く揚げてあるものだが、ほんのり甘く、かつ塩味が効いていて、食パンとクロワッサンの中間ぐらいに生地がパリツとしている。油つこいようで油つくくない。やはりマスターのスペシャルメニューだ。このカフェは木質宿もやっている。ようやくやって来た丸さんへ行つてみると、すでに日本男児が二人、ドアを開けつ放しにしたままのんきに昼寝をしていた。本当に日本人というのはどこにでもあるものだ。ただこの辺にくると日本女性は見かけなくなつた。

フンザの旅籠よりはいくらか居心地の良さそうな木質宿だ。寢床にも蚤はいないのではないかと



思われた。最も安いのがその日本男児たちのいる五人一部屋だったので、丸さんともどもそこへ転がり込んだ。

「またもや男性と同室に宿泊……しかも複数の男性に女一人なんて……何かあつたらどうするところだつたんでしょ、と思われるかもしれない。まさに女だけで寝たのはカシユガルの宿のみで、その他は常に男性と同室に泊まつている。フンザでも三人の男性と、ここでも同様、三人の男性と同室だ。とにかく四人、五人部屋だと安いのでこの様になるのだ。それでも中国では女性がまだいたので、一緒に泊まれる機会があつたが、パキスタンに入つてからは女性がいないのだからしょうがない。」

それにだいたい顔を見れば助平かそうでないかはわかる。またかりに助平であつたにせよ、女を攻撃するようなのか、そうでないのかが重要だが、それも顔を見ればだいたいわかる。そうでない部類ならもう安心だ。何か起こる可能性はまず無い。

しかもその頃の私は特に自分がセクシーでないことに自信を持っていた。よく「中性的だ」と人に言われていた。

このマスターは空手を習つていて、私にも会つた早々「ドウ・ユー・ノー・カラテ？」と尋ねてきた。カラテというものの自体は「知つている」ので、

「イエース、アイ・ノウ」と、にこやかに答えた。するとマスターはひどく嬉しがつて、何年やつて、どれぐらいできる、と聞いてきた。これは変だ、何か誤解がある、と気づいて、「オー、アイ・キャン・ノット・ドウ・カラテ」と慌てて言う、マスターはがっかりした様子で、「シー・キャン・ノット・アンダスタン・イングリッシュ」と他の人たちに言っているのが耳に入つ

た。外国語つて難しい。単語一つ、お互い違つた意味で理解していると、ときにちんぷんかんぷんな会話になつてしまう。

ともあれマスターにとつては幸運なことに、二人の日本男児が空手を心得ている人だつた。先にきていた二人のうち一人と丸さんだ。そこでみんなでマスターが通つてゐる空手道場へ出かけることになつた。

道場は大きな、色彩、作りなど、なんとなく田舎の小さな寺を思わせるものがあつた。中庭があつてその周りに縁側のようなものがある。

十歳ぐらゐから十七、八歳ぐらゐまでのさつそうとした少年たちが白い道衣に帯を締め、素足を踏ん張り、はつ、はつ、と真剣な顔をして稽古に励んでいる。マスターが入つてくるとみな「ウオツス」と挨拶した。

気合いがはいつてゐる。空手のことは何も知らないが素人目には相当水準が高いように思われた。一区切りついたところでマスターが師に私たちを紹介してくれた。目つきの鋭い落ち着いた物腰のその師範は、日本で空手を習い、免状を取つたそうだ。私たちに日本語で書かれたその免状を見せてくれた。

師範は日本からの二人に「お手前、拝見したき由にごさる」とのたまわつた。

二人が型を披露している間、少年たちは固唾をのんで見まもつてゐた。本家、本元の技だと敬意をはらつてか知れない。しかし丸さんなどは「いたたた……」などつぶやきながらやつてゐる始末。本家本元の方がずつと気合いが入つてゐない。

稽古の後にはひとりのまだ髭も生えてゐない眉目秀麗な少年と語り合いながら宿へ歸つた。どうし

て空手をやつてゐるの、と聞くと「健康のため」ということだった。「実際に使うことは考えていない」という。いかにもさわやかなこの少年、来年には大学に入る予定だと言っていた。

その夜、同じ宿に泊まつてゐるという中年のおじさん、おばさんがやつてきた。いずれも日本人。高校の先生をしている人たちらしい。おじさんはなんと小瓶の日本酒とウイスキーを一本ずつ持ってきた。

イスラム圏に旅行はしたいが酒を飲めないことが耐えられず、はるばる日本から持ってきたという。しかしもうまもなく帰るところなので一緒に飲もうよ、と持つて来てくれた。思いがけない幸運に我々はすっかり盛り上がりがつてしまい、その夜はなぜか懐かしの「スネーク・ショー」のパレードとなり、ありとあらゆる下ネタが飛び出した。アルコールの量はそう多くはなかったのに久し振りにだつたからだろうか。みんな一升瓶の焼酎を飲んだかのようにハイだつた。

それにしてもアルコールなしでイスラム圏の人たちはどのように浮き世を耐えているのだろうか。

あるときカフェのウェイターのおにちゃん煙草を吸いながらふらふらつとやつて来た。いつもはどちらかというと硬い表情の彼なのに、顔をにやつかせて何やら上機嫌だ。

あら、おにちゃん、酔つ払つてゐるのかな、と思つた。しかし酒臭い匂いもしない。それにだいたいアルコールが無いはずの国ではないか。

おにちゃんにはやにやしなから「ウィル・ユー・トライ?」と言つて私のほうに煙草を差し出した。何か特別な煙草なのだろうか。すうつと一息だけ吸つてみた。苦いだけだ。「だいたい私煙草吸わないから、特別に美味しいつて言つたつてわからんわ。」と言うと、側にいた丸さんが、

「それ煙草とちがうで。ハッシッシいうもんや」と教えてくれた。

このおにいさんのように仕事の合間にちよつと一服する程度のハッシッシはごく薄いものらしい。そうでなければもつと麻薬中毒者がたくさんいるはずだろうが、もうろうとした目をして歩いている人も見かけなかった。その後訪れたヨーロッパには、はるかに多かつたが……。

マスターはハッシッシなしでもハイになれる人だつた。私たちが出発する時、「これを覚えていけ」と「パキスターンの歌」を覚えてくれた。

「パーパーパーキスターン、パーキスターン、パーキスターン、パーキスターン」といういたつて簡単な歌で、本当にそんな歌があるのか、マスターの自作なのか知らないが、二、三回一緒に繰り返して歌うと普通覚えてしまう。おかげ様でまだそっくり覚えている。パーパーパーキスターン、パーキスターン、パーキスターン。





# NEWSLETTER

第4号  
'93.15



編集・発行 第4回世界女性会議日本国内委員会NGO部会

## 社会開発サミットに出席して

西川 潤

社会開発サミット日本政府代表団顧問・早稲田大学教授

3月11、12日の両日、コペンハーゲン市国際会議場で、世界118国の首脳が参加した史上最大のサミットが開かれた。それに先立つ3月6～10日は政府間会議がもたれた。これらと並行して3～12日にはNGOフォーラムが、国際会議場から6キロほど離れたホルメン海軍基地を開放して、そこで開催された。

今回の社会開発サミットは、近年地球の問題としてクローズアップされてきた貧困、失業、社会的分裂の問題を世界の英知を結集して討議するために開かれたものである。この会議では世界の貧困者は十数億に及び、完全失業者は1億2千万余でその3分の1が先進工業国に見いだされる状況、また、南北を問わず社会の中で女性、障害者、高齢者、先住民族、外国人移住者など弱者層の疎外がすすみ、社会の一体性が脅かされている状況に対する危機感が強く表明された。これらが、南北問題、民族問題を激化させて、地球社会の一体性をも大きくそねている。首脳たちは、これらの社会問題解決のための10のコミットメントを宣言し、これらを具体化する行動計画を採択した。

宣言、行動計画では、社会開発の中心課題として、人間を中心においた持続可能な発展、民衆参加型の発展という新しい開発路線を正面から押し出した。そして、これを実現するために、政府のみならず市民の諸セクター（個々の市民、NGO、企業、労働組合、非営利法人等）、即ち市民社会の参加と政府とのパートナーシップが不可欠であることを示した。

それゆえ、この会議では準備段階からNGOが各国の国内委員会やナショナル・レポートの作成に参加し、ニューヨークで3回にわたりもたれた国連の準備委員会で発言し、サミットの政府間会議でも、あるいは政府代表団の一員として、またNGO自身として、それぞれ発言し、宣言・行動計画の作成、採択に大きな役割を発揮した。

日本でも昨年7月に社会開発NGOフォーラム日本準備会が結成され、国連準備委員会に塩月賢太郎（明治学院大学教授）、山下政一（アジア保

健研修財団常任理事）、サミット政府代表団に伊藤祐慎（連合参与）、北沢洋子（草の根援助運動）、西川潤（早稲田大学教授）の計5名を送った。

コペンハーゲンのNGOフォーラムには60余名の会員が参加し、日本ブースを設置し、世界の人々に情報を提供するとともに、2度にわたり日本コーカスを開催し、また日本政府と国際NGOの意見交換セミナーを開いた。いずれも満員の盛況で好評を博した。特筆すべきは、日本の民間提言書が各国から高い評価を受け、国際NGOが採択した「コペンハーゲン・オールタナティブ宣言」の土台となったことである。

社会開発サミットを通じて、日本のNGOは政府と責任あるやり方で効果的にパートナーシップを組むまでに成長していることが明らかになったといえよう。準備会は「社会開発NGOフォーラム」と名称を改め、北京の女性会議、96年の貧困撲滅年に向けて、さらに活動していく予定である。

日本準備会は、この間、定期ニュースレターを発行し、神奈川で国際NGOを招いたセミナーを開催する一方で、国会議員と連携しつつ、村山首相にサミット出席を申し入れ、また、英文カントリーレポートを作成するなど、活発な活動を展開した。宣言・行動計画案の内容については、政府と2度にわたり意見交換会を開き、また、村山演説の内容についても数度にわたり、協議を行った。

### 目次

- ・ 社会開発サミットに出席して ..... 1
- ・ 第49回国連総会第3委員会 ..... 2
- ・ 第14回女子差別撤廃委員会 ..... 2
- ・ NGOフォーラムの会場変更!? ..... 3
- ・ 日本のWID ..... 3
- ・ 北京へようこそ ..... 4
- ・ 北京に向けて ..... 5
- ・ 女性会議を考えるフォーラム ..... 5
- ・ 震災見舞電報 ..... 5
- ・ ジャーナリストの取材申込み ..... 5
- ・ 民間女性団体の活動 ..... 6

## 第4回国連総会第3委員会に出席して

日本政府代表代理 目黒 依子

本第3委員会では、11議題に関する一般討論が、1994年10月11日から12月9日まで行われた。社会開発や難民問題、児童の権利、人権問題、麻薬統制、犯罪防止などと共に女性の地位向上に関する討議が行われたが、ここでは「女性」議題を中心に報告する。

まず、第4回世界女性会議準備事務局長のモンゲラさんは、150カ国以上で世界会議準備委員会が設置され、130のナショナル・レポートが提出され、また5地域すべてにおいて地域準備会議が開催され、そこで経済調整が女性の自立力の障害であり、戦争や紛争が女性の犠牲を大にしていることが明らかとなったこと、そして、世界会議を成功させるために、行動綱領の作成とNGOの参加、各国の強力なコミットメントとフォローアップ体制が不可欠であると強調した。UNIFEMの新所長ヘイザーさんは、同機関の活動の中核は女性の生活の維持とエンパワメントであるとし、各国政府のさらなる支援を要請した。各国の公式声明中、注目された発言には次のようなものが含まれる。INSTRAW/UNIFEMの統合については、賛否両論が提示されたが、明確な立場表明は少なかった。CEDAWに関しては、報告書審議の時間と財源の確保や留保事項の制限の必要性が主張された。世界会議の行動綱領については、焦点を絞ることやジェンダー統計の重要性、女性の無報酬労働への注目、NGOの努力などを強調する国もあった。最近の状況を反映する発言として、ヨーロッパにおける構造変化が経済活動におけるジェンダー・バランスに影響を与えつつあるとするECのものがあった。

「女性」議題に関する討議の特徴は、1) 第4回世界女性会議の準備状況に関する発言が多かった、2) 1994年9月の国連人口・開発会議と1995年3月の社会開発サミット、そして9月の女性会議との連携が認識された、3) 「女性に対する暴力」に関する宣言」とその特別報告者の任命を歓迎する傾向が著しかった、4) 男女は異質であるとする規範や社会システムをもつ国の代表（特に男性の）が「我が国は男女平等を推進している」といった発言をするケースが少なくなかった、5) 途上国の場合、女性の自立の源は教育と職業訓練であるという主張が特徴、などであったといえる。

第3委員会全体としては、「女性」以外の議題に関する討議においても、女性の状況に注目する、或いは留意することなく問題解決を計ることの困難さが認識されていた。その意味で、特

定問題としての「女性問題」としてのみならず、社会・人道・文化の諸問題に女性の視点を取り入れる統合的アプローチの可能性が見られた。一方、これが、男性中心のパワー・ポリティクスに政治的交渉の手段として利用されることにもなっていると思われる。（上智大学教授）

## 第14回女子差別撤廃委員会に出席して

女子差別撤廃委員会委員  
待 命 大 使 佐藤 キン子

1月16日から2月3日までニューヨークで第14回女子差別撤廃委員会が開かれた。まずモンゲラ第4回世界女性会議事務局長が、今年の婦人の地位委員会で行動綱領案の検討が行われること、その検討への女子差別撤廃委員会の貢献、女性の人権が国連の人権関連業務に統合されるべきこと、撤廃条約の加盟国が139になったこと、撤廃委員会の会期の延長問題が5月の加盟国会議で検討されること等についてスピーチをした。次いで、議長から、第13回会合以後の議長の活動の報告があった。

昨年行われた選挙の結果、23名のうち12名の委員が新任、内4名が再任された。議長はイタリアの Ms. コルティ、副議長はチュニジア、ベネズエラ、中国、ラオス、ドミニカになった。

今年はアルゼンチン、ボリビア、チリ、クロアチア、フィンランド、モリシャス、ノルウェー、ペルー、ロシア、チュニジア、ウガンダの11カ国の報告が審議された。

他に、昨年延期されたオーストラリア、コロンビア、ガイアナ、日本についての最終コメントが審議された。新任の委員は昨年の審議に参加していないが、議長から、昨年の審議に参加した委員を信頼してほしいと要請があり、新委員はこれを受け入れて、審議、採択が行われた。日本の最終コメントの主な内容としては、日本政府報告書の詳細さや女性の地位向上、特に、公的、政治的評定での女性の参加の拡大に関する政策を評価し、条約の実施の障害についての批判的記述やアジア諸国の女性に対する性的搾取に関する記述が欠けていること、女子に対する雇用上の差別が残っていること等を指摘すると共に、次回報告では、生産業に関する取り組み、均等法に関する措置などを盛り込むこと、女性団体と対話を行

うことを示唆している。

次に、第4回世界女性会議に提出するため、事務局により作成された2つの文書案が検討され、第1文書は女子差別撤廃委員会の成果を中心に書くこと、西暦2000年までに留保なしに全ての国がこの条約の批准を目指すべきこと、女子差別撤廃委員会の役割と展望を書くこと等、第2文書は関連のデータを盛り込むべきこと等の意見が付き、事務局で書き直しされることとなった。

また、女子差別撤廃条約期間の制約なく会合でできるような20条を改正すべきこと、手続終了までは1996年まで例外的に3週間の会議を2回開催出来るようにすべきこと等を内容とする事務総長への勧告が採択された。

選択議定書については、1993年6月の世界人権会議のウィーン宣言と行動計画の中で、「女子差別撤廃条約に関する選択議定書の準備段階で、諸難を導く可能性を検討すべき」とされ、女子差別撤廃委員会が、昨年、事務総長に選択議定書の作成を要請していたが、昨年国連としての動きはなかった。今委員会には、昨年オランダのリンバーク大学での私的専門家会議（女子差別撤廃委員も3人参加）が作成した草案が提出され、大多数の委員の賛成により、事務総長への意見書が採られた。内容は、批准しない国は拘束されないこと、条約違反について個人や団体は女子差別撤廃委員会に請願できること、請願が受理された後の手続き等である。

また、委員会開催地をジュネーブに移すことの事務総長への要請が決められた。以上が審議の概要である。

11カ国の各国政府報告の審議の中で私が非常に強く感じたのは、未だに女性が、貧しさ、性暴力、宗教的差別などで苦しんでいる国が非常に多いことである。

## 女性NGOフォーラム北京95の会場変更!?

本年3月15日から4月7日までニューヨークで開催された国連第39回婦人の地位委員会の席上、中国の代表から、8月30日から9月8日まで北京労働者スポーツサービスセンターで開催される予定の女性NGOフォーラム北京95の会場を変更したい旨の発言があった。

中国組織委員会によると、この会場変更は、労働者体育館に構造的な欠陥が発見され、大きな国際会議の使用水準に合わないためである。

新たな会場として検討されているのは、北京から北北東の郊外(空港から

は北京と反対側)の懷柔(ファイロウ)という景観地で、政府間会合の開かれる国際会議場からは車で45分の距離にある。会議室は1700人収容のものが1室、1000人が1室、700人が1室、200人が8室、100人が5室、50人が70室あり、当初から予定されていた31のテントを設置することによるスペース、1000のバラソル、215のブースが利用可能である。開会式は2万人以上の座席を持つ国立オリンピックセンター(国際会議場の隣)で開かれる。

懷柔のホテルやゲストハウスは、総計で159のシングルルーム、1971のツ

ーベッドルーム、615の3ベッドルームがあり、料金は1室一晚25ドル〜65ドルである。ホテルなどは空港と懷柔の間や空港と北京との間にもある。国際会議場、懷柔、空港、フォーラム出席者用ホテルの間にはシャトルバスが運行される。

中国側の会場変更の発言に対しては、NGOフォーラム事務局側から、国際会議場との近接性等の観点から、今までの開催予定場所でそのまま開催するようという要望が出されたが、開催予定場所の決定は、4月にNGOフォーラム事務局のスパトラ・マスディット議長とアイリーン・サンチャゴ事務局長らが、中国提案の新たな開催場所を視察した上で、最終的になされる予定である。

## 日本のWID(途上国の女性支援)

外務省経済協力局国際機構課長  
石田 仁 宏

WID(Women in Development、「途上国の女性支援」または「開発と女性」)とは、開発計画、開発援助をより実効性のあるものにするためには、女性が開発の受益者の一部としてのみ扱われるのではなく、担い手として開発に参加することが不可欠であるとの認識を踏まえ発展した概念です。国連や経済協力開発機構(OECD)の開発援助委員会(DAC)においてもWIDに関する議論が盛んになっており、このような国際的な認識の高まりを受け、我が国は1992年6月に閣議決定された「政府開発援助大綱」(ODA大綱)にも援助の効果的実施のための方策として(1)開発への女性の積極的参加、及び(2)開発からの女性の受益の確保について十分配慮することを明記し、援助政策上、WIDを環境、人口等とともに新しい時代のODAの重要事項として位置付けています。

外務省は、89年に経済協力局長を座長としたWID援助委員会を設置するとともに、経済協力局各課にWID担当官を指名しました。94年からは

我が国が援助を実施している国のすべての大使館にWID担当が指名されています。援助を実施する国際協力事業団(JICA)及び海外経済協力基金(OECF)にも担当課が設置されています。

本年9月には北京で第4回世界女性会議が開催されることもあり、我が国としてさらに開発途上国の女性支援の分野における協力の充実を図っていく考えです。また、こうした気運を国際的にも盛り上げていくことが重要との認識から、本年1月の日米首脳会談では村山総理がクリントン大統領にWIDをコモン・アジェンダ(「地球的發展に立った協力のための共通課題」)の新たな協力分野として取り上げること提案され、賛同を得ました。

実施面では、教育、地方給水の事前調査班にWID配慮団員を加える等WID専門家の活用により、案件の策定過程におけるWIDの推進に努めています。また、「草の根無償資金協力」や青年海外協力隊の派遣について実績が増加し、現地の女性の所得向上、自

立支援に草の根レベルで直接役立つ援助が一層普及、浸透してきています。

93年度の実績を分野別に見ると、WID関連プロジェクト方式技術協力では家族計画、母子保健等の保健医療分野が多く、3分の2を占めている他農村開発、林業普及の分野でも実績が増加しています。一般プロジェクト無償資金協力では、水案件、医療協力(産婦人科機材供与)が中心となっており、これらは労働の軽減、健康の維持など女性を取り巻く環境の整備に重点をおいた援助です。青年海外協力隊の派遣の職種には、看護婦、助産婦、栄養士、保母、被服等、伝統的に女性の地位が確立した専門職の分野での協力が多く、これらの協力は受益者が女性であることに加え、この分野における女性の専門的知識、経験の増進にも役立っています。草の根(小規模)無償資金協力や我が国のNGOを対象としたNGO事業補助金では、特に貧困層の女性を対象とした職業訓練、医療協力が多く、人道的色彩の強い援助が多いといえます。

# 北京へようこそ

中華全國婦女聯合會書記處 書記 華 福 周

親しい姉妹、友人の皆さん、1995年は国連設立50周年、国際婦人年20周年、ナイロビ将来戦略採択10周年を迎えます。また、北京で「平等、開発、平和のための行動」を主の、雇用、保健、教育を副のテーマとする第4回世界女性会議が開かれます。

これは中国人民、中国女性ばかりでなく、アジア全体の人民と女性にとっても大きな事柄です。私どもは心から、一衣帯水の隣国、日本の皆様へ NGO フォーラムへの参加を歓迎します。私どもは、世界会議と NGO フォーラムの準備及び大会の期間、中日が相互に情報交換し、その成功のため、時代に悔いのない素晴らしい貢献をしたと思っています。

1992年に第4回世界女性会議の招集が決定し、8月に中国組織委員会が設立され、1993年7月の国務院全体の機構調整の結果、國務委員の彭雲（ボンペイイン）先生がその主席となりました。組織委員会は全部で30の職場からなり、メンバーは37人、中に女性の正・副部長、つまり大臣次官クラスが12人います。組織委員会の下に5つの専門委員会：世界女性会議委員会、宣伝動員委員会、NGO フォーラム委員会、行政財務委員会及び安全警備委員会と併設（総務部）が設置されています。

私どもは婦女聯合会は、主に NGO フォーラムの準備活動に参加しております。NGO フォーラム委員会は150人余からなり、主任は婦女聯合会の副主席兼書記処第一書記の黃蓉蓉（ホワンチーツオ）さんです。

私どものした仕事としては、第1に、1993年6月に第4回世界女性会議のモンテネグロ事務局長が、国連の最初の視察団を率いて中国を訪問され、その際、第4回世界女性会議の会場が北京国際会議センターに、大会の開会式は人民大会堂、また NGO フォーラムの方は北京労働者スポーツサービスセンターに決まりました。1994年2月には NGO フォーラムの主催者・議長のスバトラ・マスティットさんか視察され、ホスト国である私どもも準備状況について話し合いました。6月には、国連第2回視察団が北京を訪れ、9月には、国連のガリ事務総長が中国を訪問し、ホスト国との協定を結びました。

第2の仕事としては、国家報告を作った1994年3月に ESCAP と第4回世界女性会議の事務局に提出し、6月には、『中国婦人の状況』（白書）を出版いたしました。

第3の仕事としては、社会的なPRと動員です。全部で10万部の宣伝資料を作り、この世界会議の趣旨と意義を宣伝しました。1993年だけで全国のマスコミで数部のニュースが出、中央テレビ局 CCTV では、この第4回世界女性会議がテーマの番組を何度も報道しました。また、中国組織委員会として、国内の18社のマスコミを通じて世界会議の広報用のロゴマーク、歌、ポスターを募集しました。ロゴマークの図案は緑色の鳩がくわえた橙色のリボンがC、つまりChinaの頭文字を描き、そのリボンには白で「95 BEIJING」と書かれています。（総理府注：国連の世界女性会議マークは従来からの鳩、NGO フォーラムのマークは新しく定められた8人の人か手を繋いだものです。）

第4はスタッフの養成です。各省で、国連会議事務局、ナイロビ戦略、パソコン、外国語のトレーニング等を実

施し、参加したスタッフの数は既に180万人程です。

第5に、組織委員会として、会場や展覧会場等の準備を行っています。NGO フォーラム委員会は、テーマ別シンポジウムに取り組んでいます。現在全部で42テーマあり、女性の教育、就職、保健、参政、法律上の地位などの問題が網羅されています。直接 NGO フォーラムに参加する中国国内の人は5千人と推定しています。

第6に、団を組織して、婦人の地位委員会、マニラのESCAP地域 NGO フォーラム、カイロの国際人口・開発会議、また、北欧、ヨーロッパ、ラテンアメリカ地域等の世界女性会議と NGO フォーラムに関連する様々なフォーラムに参加しています。

第7は、6月末に NGO フォーラム'95 の NGO 実行委員会が、中国組織委員会及び中華全国婦女聯合会の招きにより訪中し、世界5地域の NGO の連絡を担当するスタッフの準備状況について経験の交流を行いました。

次に生活面です。第1点目は、ホテルの客室数ですが、私どもは皆様の方々の様々なニーズにお応えするため、条件、交通、サービス、価格等を基準に、全部で星印のあるホテルを88、星印なしのホテルと招待所を33選びました。各々のホテルが客室を40%くらい提供すると、全体で3万のベッド数を確保できると予測しています。

2点目にホテルの予約ですが、参加者の宿泊の確保等を順調に行うため、中国組織委員会は、4つの用紙を準備しました。①政府関係会のホテル登記表（予約申込票）は、ニューヨークの中国国連代表部から各国に配布されます。② NGO フォーラムのホテル登記表は、中国組織委員会がニューヨークの NGO 実行委員会に交付し、NGO 実行委員会から各国の参加者に送ります。③観光予約登記表は①②と同時に発送します。④記者のホテル登記表は、中国組織委員会から各国に駐在している大使館またはニューヨークの中国国連代表部に送ります。

各々の登記表は、参加者が記入した後中国組織委員会に送り、中国組織委員会が各ホテルに渡し、各ホテルは、客室の空き具合と参加者が登記表に書いた希望に基づき部屋を準備します。登記表に希望ホテル名のないオーダーは、先に届いたものから会場の近くにアレンジし、遅くなる程会場より遠くなります。そしてホテルはオーダーの受領後、直接予約者とコンファームを取ります。

NGO フォーラムの会場、展覧会場等の借用的是、NGO 実行委員会、中国では工作委員会に連絡してください。

親愛なる姉妹、友人の皆さん、時代は21世紀に近づき、直面する多くの問題の解決には、各国政府、人民、そして女性の共通の努力と協力が必要です。中日の長い友好の歴史を顧み、私たち女性の多くの功労に誇りを持つと同時に、未来を展望し自信に満ちて進んでいきたいと思えます。私達両国の女性が手を携えて天の平分を支え、平等、開発、平和のためにできる限りの貢献をしようではありませんか。日本の皆様方の積極的な御参加と、大会成功のための惜しみない努力を信じております。

（平成6年12月1日 NGO 部会主催「女性 NGO フォーラム北京'95」の準備状況について聞く会）における講演を総理府において仮訳・抜粋  
（注：会場については、3頁の記事参照）



## 一 北京に向けて一 女性問題を巡る意見相次ぐ

NGO部会主催「国連第3委員会、女子差別撤廃委員会について聞くとともに  
北京に向けて女性問題について語り合う会」より

総理府では、今年の9月に北京で開催される第4回世界女性会議に向けて、第4回世界女性会議日本国内委員会NGO部会主催の会合を適宜開催しています。

2月27日に総理府において開催された標記の会合では、北京に向けて女性問題への取組についてNGO等の方々と意見交換が行われたセッションにおいて、第4回世界女性会議に向けて、女性問題への取組について意見交換が行われました。

会場に集まった民間女性団体を始め、マスコミ関係者、都道府県等の女性行政担当、女性国會議員など約170名の方からは、

・第4回世界女性会議の日本代表团に

NGO代表を出来るだけ多く加えるべきだ。

・放送などマスメディアの場で、特に方針決定できる立場の女性を増やす必要がある。

・開発援助計画の立案・評価等に女性の学者をもっと多く参加させる必要がある。

・ジェンダー統計の作成・分析過程にNGOや女性研究者などを加えるべきだ。

・学校教育で、ジェンダー感性を豊かにするため、幼小時から男女混合集団を日常化する。進路指導に性差を持ち込めぬ等が必要だ。

・日本には、雇用不安や男女間の賃金格差、長時間労働などによる健康・母

性破壊などさまざまな問題があり、多くの女性が、男女差別の撤廃、労働条件の改善を求めている。

・来日女性問題など、女性の性搾取や子供の売春防止対策が必要。また、そのためのNGO活動の支援が必要だ。  
・プロジェクトが終わった後の評価というのが非常に大切であるので、行動綱領案中の「プロジェクトの立案、実施、監視」の後に評価を入れていただきたい。

・核兵器を廃絶すべきだ。  
・北京会議では、世界に先駆けて超高齢社会を迎える日本の離婚女性、家庭について、現状を話し合うと共に、今後のビジョンを探っていただきたい。  
など、多くの意見が相次ぎました。

## 第4回世界女性会議を考えるフォーラム開催される

～塩尻市、堺市、富山県発～

第4回世界女性会議に向けて、国及び地域における取組について相互の情報交流を行い、国際的視点から女性問題を考えるとともに、世界会議に向けての気運を盛り上げるため、男女共同参画宣言都市の塩尻市及び堺市において、第4回世界女性会議日本国内委員会、総理府との共催で、「第4回世界女性会議を考えるフォーラム」を開催した。会議は、「地球市民として地域から世界へ友情と平和の輪を広げよう」をテーマに、国内委員会NGO部会の委員の方に講師をお願いし、総理府の坂東男女共同参画室長をコーディネーターとしてパネルディスカッションを行った。各講師から、世界女性会議に向けてのNGO部会の活動状況、民間団体や国の取組状況、行動綱領案の内容、我が国における現状と課題等について話され、会場の参加者からは、地域における実情、民間の取組の状況、男性とのパートナーシップをどう作っていくか、女性の政策決定への参画促進について等多数の意見や質問が出された。

〔塩尻市〕

開催日 1月30日(月)

会場 総合文化センター

参加者 300名

講師 縫田暉子委員

藤原房子委員

〔堺市〕

開催日 3月1日(水)

会場 サンスクエア堺

参加者 300名

講師 有馬真喜子委員

利谷信義委員

〔富山県〕

開催日 3月27日(月)

会場 バレプラン高志会館

参加者 300名

講師 西川 潤委員

深尾凱子委員

## 中華全国婦女聯合会からの震災見舞電報

日本国内閣総理大臣官房男女共同参画室  
坂東眞理子室長 殿

貴国関西地区に強烈な地震が発生し、国民の生命・財産に重大な損失を受けたことを伺い、私どもは深い悲しみと哀悼の感に打たれました。中華全国婦女聯合会と中国女性は、謹んで貴国の災害地の女性及び子どもの方々に對して心からの御慰問と、災難に遭われた方々に対して哀悼の意を申し述べます。

地震発生後、婦聯政府は迅速かつ有効な措置をとられ、多角的な救援作業が、現在、正に展開されていることを拝見しております。私どもは、広大な災害地の人々と女性がこの巨大な自然災害から早く立ち直れることを信じております。

中華全国婦女聯合会  
1995年1月20日

## ジャーナリストの取材申し込みについて

NEWSLETTER 3号でお知らせしたジャーナリストの参加許可については、3月から国連広報部より申請書の配布が始まっている。申請書に記入の上、編集局長等からの公式レターヘッドによる命令書を添えて郵送又はファックスで申し込む。申請書の認可は郵送又はファックスで送付されてくるので、世界会議の会場で写真付きの身分証明書2つを見せてパスと引き換える。

このパスは政府関係会合である第4回世界女性会議にも女性NGOフォーラム北京'95にも有効である。申請書を認可されるのは、新聞、テレビ、週刊誌などの報道機関に限られる。世界会議の会場でも申請手続きはできる。申請書は、各都道府県・政令市の女性問題担当課からもコピーを入手できる。ビザは7月4日までに最寄りの中国領事館等に申し込む必要がある。

# 北京に向けての民間女性団体の活動

北京に向けての国際婦人年連絡会の活動

国際婦人年連絡会事務局長  
山口みつ子

「女性問題」解決にむけてあらゆる領域の団体で構成する連絡会は、これまでのNGOフォーラムには加盟団体がそれぞれ独自の参加をしてきたが、北京のフォーラムに初めて連絡会として参加することになった。北京に向けて一連の国際会議に中村道子世話人らが出席してきたがこの3月には社会開発サミット及び引き続き婦人の地位委員会へ出席し行動綱領についての見解と提案を行う準備も整った。北京のフォーラムには100名余が参加する。3つの分科会開催のため手続きをとり途上国の姉妹のため1万ドルの寄附金を集めた。連絡会は「婦人の10年」以来の女性問題を目下、討議中でこれを踏まえ8月の北京フォーラムを挟み「21世紀に向けて…NGO日本女性フォーラム」とし、6月会議を主婦会館でNGO日本女性大会を11月22日に日比谷公会堂で開催することになった。北京に集う世界の女性たちとの連携をバネに行動目標をたて民間女性のエンパワーメントと活力を促す。

北京に向けての(財)アジア女性交流・研究フォーラムの活動状況について

(財)アジア女性交流・研究フォーラム  
管理課長 熊本哲生

昨年の10月8日、女性NGOフォーラム「北京'95」の参加希望者に対する第1回勉強会を開催しました。勉強会では、女性問題に関する国連の動きやフォーラム参加への登録方法などを説明し、10月23日には、「東アジアの女性たちは今」というテーマでナイロビ世界女性会議の事務局長をつとめたレティシア・ラモス・シャニフィリピン上院議員や東アジア地域のNGOのリーダーの方々を招いて、東アジアの女性の現状と今後の行動計画についての学習を行いました。

最終的には、55名の方々がニューヨークへの個人登録申請を行い、活動決定し、ワークショップ開催に向けてそれぞれのグループに分かれて勉強会を重ねています。ビデオ教材を中心とした勉強会、外部講師を招いての勉強会などそのスタイルは様々ですが、北京に向けて参加者一同、女性の地位向上を目指して責任ある参加をするための具体的活動をどのように展開しようかと張り切っています。

草の根の声を北京に  
～関西ネットワークの活動～

'95北京世界女性会議  
関西ネットワーク事務局  
森屋裕子

「'95北京世界女性会議関西ネットワーク」は、1昨年の9月に情報交換と学習活動を目的として発足しました。私たちのような草の根のグループには情報が届きにくかったので、ネットワークを組んで組織的に情報収集をする必要を感じたことと、北京に行くに際しての自分たちの視座を確立したかったことが、発足の動機になっています。

現在、会員は団体、個人あわせて約50グループ(人)ですが、2.3カ月に一度のニュースレターの発行と、講演会、学習会の開催が生じる活動内容です。平成6年度には、大阪府のジャンプ活動交流基金の助成を受け、連続公開学習会「北京への道」を開催しました。所属する各グループは、現在NGOフォーラムでのワークショップなどに向けて準備に入っています。

今回は、NGOの声を政府間会議に反映していこうという動きを感じることでできて喜んでいます。小さな草の根のグループの声を、できるだけたくさん北京にもって行きたいと考えます。



北京会議へ向けての(財)横浜市女性協会の取り組み

(財)横浜市女性協会  
納米恵美子

横浜市では北京会議NGOフォーラムへ市民を派遣します。市民男女130人近くが論文を書いて応募し、すでに参加者15人を決定しました。NGOフォーラムではワークショップを実施する予定で、帰国後10月には報告会を開きます。

派遣者及び一般向けに、北京会議に向けての「連続セミナー」(95年1月～6月、全9回)を開催中で、世界情勢の変化(有馬真喜子)、国連や政府の取り組み(坂東真理子)、NGOの準備状況(中村道子)、女性の政治参加(山口みつ子)、開発問題(原ひろ子)、女性に対する暴力(成能民江)、中国の現状(若林敬子)、日本女性の現状(大沢真理)、リプロダクティブ・ライツ(樋口恵子)などの項目をテーマにしています。第1回(11/30)には約120人の参加がありました。

また、フォーラムよこはま情報ライブラリ(桜木町・ランドマークタワー13階)では「北京会議情報ファイル」を用意し、約200点の資料を1)会議概要、2)国連関係、3)NGOフォーラム、4)海外NGOの動き、5)日本政府関係、6)国内NGOの動き、7)新聞・雑誌記事、8)横浜市関連に分類し、随時情報を更新して公開していきます。どなたでも閲覧できますのでご利用ください。

問い合わせその他は、  
☎045-224-2000まで。

アンデスの女たち ―フェミニズムに燃える

C アンドレアス著  
サンデイ・サカモト訳 ￥1339

本ものの地方分権・地方自治

浪江 虔著 ￥800

ワーグナーと人種差別問題

ゴットフリート・ワグナー著  
岩淵達治訳 ￥700

消費税は廃止できる

北野弘久 ￥700

貧しい「経済大国」を撃つ

降旗節雄 ￥700

学歴社会をぶつつぶせ!

尾形 憲 ￥800

非核法・非核条約

新護憲の三千語運動 ￥520

サイレント マイノリティの BOC出版部

あごら 208号 ●発行 1995年6月10日

●編集 あごら編集部

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-4-303

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●振替00100-0-5264

●発行人 あごら企画会議 定価1030円(1000円+税30円)

この ひろい宇宙に  
たった一つの地球

その 大きな地球に  
たった一人のわたし  
そして あなた

かけがえのない地球  
かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから  
たいせつに たいせつに しよう

あなたも  
わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だれもが だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

へあこら

人と人の出会うひろば

へあこら

人と人の共に生きるひろば